



異世界宝石物語

第1章

宝石の導に沿って

.....

4

第2章

お姫様の最後の晩餐

.....

48

第3章

深緑の姫君による再建の提案

.....

84

第4章

真実を知るための甘い罠

.....

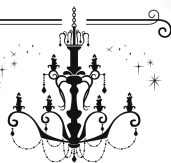
115

第5章

終わらないバトン

.....

143



登場人物

姫沢ありさ(ひめさわー)

あなたの幼馴染。にひひ、という笑顔が特徴。明るくて、誰とも仲良くなれるタイプ。

エリーゼ・ル・ローレッタ

異世界である、ラルゴ王国の王女。生粋のローレッタの血族。光の魔法が使える。良い子気質で心優しい性格。

フレデリカ・アズール

女性にして、ラルゴ守護騎士団団長。隣国の献花岬出身。

とても誠実で皆から慕われている。

龍頭オトハ(りゅうずー)

和国からの刺客。忍者のような格好をしており、デバフ魔法の使い手。

エリーゼ暗殺を企てているようだが…

セレナ・ワルフローレ

レーベル会社カオスプロダクションの女社長であり、チャーム魔法の使い手。謎多き人物。

第一章 宝石の導に沿って

——汝、余の声が聞こえるのか？

余の契約者と、瓜二つの汝よ。

余は、『アンデッドドール』に宿りし光の死神。

時空をひずませることや、時を巻き戻すことを得意とする。

汝らは引き寄せられるだろう。

さすれば、余はいつの日か再び蘇る。

蘇りし暁には、人類すべての破滅が訪れる。

案ずるな。

既に汝らは、抗うことはできぬのだからな。

……………。

「とかいう、変な夢を今日見たんだよね。ほんつと意味不明でしょ？中二病かよって」

「なにそれ、変なのー」

十月初旬のある日の放課後。

クラスメイトと談笑するのは、俺の思い人でもあり幼馴染の姫沢ありさ。

そうだ、今月は彼女の誕生日でもある。

アンデッドドール：聞いたことがないけど、ドールと言いつつも人形ではなさそうだな。
なんだろうな、……宝石とか。

そういえば、十月生まれの誕生日はオパールだという風に雑誌で見つけた。

オパールのアクセサリー：ロマンチックだな。

そうだ、プレゼントに買いに行くか？

ありさの誕生日プレゼントを買いに行こうと思った俺は、どこにでもいる絵に書いたようなごく普通の男子学生だ。

とはいっても、アクセサリー、何にしよう。

ネックレス？ …いや、大きめのネックレスだときつと値が張るか。

ピアス？ …いいや、確かありさはピアスあけてなかったよな？
指輪？ いやいや、恋人じゃあるまいし大胆すぎやしないか？

一人でひたすら悶々として早数十分。

実物を見てすらいらないのに答えがわかるはずもない。

買い物は、本人にもついてきてもらえばきつと気に入ったものを選べるんじゃないだろうか。
俺は下手にサプライズすることを早々に諦めて、ありさに買い物についてきてもらえないか、
思い切って訊ねてみることにした。

「なあ、ありが。今月お前の誕生日があるだろう？ …よかったら買い物一緒に来てくれない？
お前の誕生日プレゼント選びたいから」

告白でもするかのような、そんな緊張感。

ぶつきらばうに聞こえるかもしれないが、それでも精一杯言葉を選んだ。
告白なんて生まれて一度もしたことはないけど。

しかし、その緊張は必要のないものだったと思い知らされるくらい、ありさはいつも通りだ。

そりゃそうだよな。

「え。いいのに、そんなに気を遣わなくても」

よくよく考えてみたら、俺は今まで、華やかな誕生日プレゼントをありさに贈ったことはなかった。

いつもありさの誕生日会に呼ばれては、気になっている文房具をプレゼントする程度。

今年で学校を卒業する年齢の男がそんなじゃダメだろうと薄々感じてはいたけど、

その文房具のセンスがいいと喜んでくれるありさの言葉に、いつも甘えてしまっていた。

だから、今年こそはちゃんとしたものをプレゼントしたい。

「気を遣ってるわけじゃないよ。ありさに似合うアクセサリーを買いに行きたい」

少しの間。そして、きょとんとするありさ。

するとありさは小さく笑って、うんうんと頷いた。

「ふふ。突然変なのっ。嫌いじゃないけどね、そういうところ」

「……じゃあ、ついてきてくれるんだな?!!」

「いいよ。今週末なら暇だし。」

そうやってにひひと笑うありさの顔が、いつも以上にたまらなく可愛く感じた。どうして、この時それを言葉にできなかったんだろう。遠く離れてしまってからでは、遅いの——。

週末。買い物当日。

アクセサリーは、あまりピンとくるものが見つからなかったけど……

その代わりといつては何だが、あの服が欲しい、この服が欲しい、と、言われたままにプレゼントした。

ショッピングモールの帰り道。

ありさはとても満足そうにしている、その嬉しそうな顔を見ながら、俺は買った荷物を手に悦に浸っていた。

るんるんな足取りで前を歩くありさを見て、今日一緒に買い物が出来て本当に良かったと思った。思っていた矢先に。

……何やら虹色に光る何かが俺たちの視線を引いたんだ。

「ねえ、あれ……なんだろう」

とことと、と、ありさは小さく足音を立てながらすぐにその光に駆け寄った。
俺もそのあとに続く。

「わあ、綺麗……。誰かの落とし物かな……？」

ありさは、何の迷いもなくその綺麗な宝石を拾い上げる。

夕方の時刻で薄暗いにもかかわらずとても高貴な存在感を感じるその宝石を、まじまじと見つめていた。

角度によって輝き方が変わる、不思議な宝石。

いかにも高価そうな代物だ。

「すごくきれいだね……。この石、なんていう名前なんだろう？」

「ありさの誕生石のオパールにすごく似てるな。こういう宝石のアクセサリーが見つければよかったのに」

「あはは。確かに、オパールに似てるね。これ、欲しいけど……。流石になくしちゃった人も困

「つてるよねきつと」

ありがたそう言った瞬間、その石はとてつもない光を放った。

目が覚めたら異世界にいるだなんて、アニメや小説の中の話だ。そう、思っていた。

そのアニメや小説の中の話なら、よかつたのにな。

……。

「はあ?! エリーゼ姫に逃げられた?!」

ん……?

ここは……どこだ?

……遠くから聞こえる誰かの怒鳴り声で目が覚めた。

「すみません、私たちがしつかり見張っていなかったばかりに……」
「申し訳ございません……」

鎧をまとった人物らが、何やら物騒な会話をしている。

怒声をあげた女性だけ、装飾の多い派手な忍者のような恰好……と形容するべきだろうか。

「本当使えない！ 今から急いでエリーゼ姫を探して！ まだそう遠くないはずだから！！」

「はい……………！！」

「はいッ……………！！」

忙しい会話に、聞いたことのない姫の名前。嫌な予感どころの騒ぎではない。

軽く怖気づきながら、どうするべきかと二の足を踏んでいると、知らない誰かに耳打ちをさ

れた気がする。

恐る恐る振り返ると、そこにはありさにとてもよく似た女性が居たんだ。

「……そのあなた。あなたは……教団クロノスの方ではありませんね……？」

「え……？ あ、ありさ?!」

その女性は、本当にありさによく似ていた。

綺麗な白い肌に、長い茶髪。

違うところといえば、深緑の瞳の色くらいか……

そんな事を咄嗟に思考する。

その続きを観察しようとしたがすぐに遮られた。

「しっ……静かに。教団に見つかっては困ります」

その女性は、人差し指を口元に立てて小声で注意を促すと、慎重に辺りを見渡した。

今のところは問題ないと判断したのか、その女性は静かに、でもどこか凛々しく俺に名乗っ



たんだ。

「私はエリーゼ・ル・ローレッタ。ラルゴ王国の王族です。」

「え!？」

ラルゴ王国？ エリーゼ?!

聞いたことないどころか、小説かなにかの登場人物？

——もしかしてこれって……

「あなた、この人ではないのでしょうか?……ここにはあなたも危険です。ない辺境まで、急いで逃げましょう。」

追手がつか

——異世界？

ふと、それでいてしつかりと、頭の中をよぎったのはその漢字三文字。

しかし、エリーゼって……

さっきの怒声は、逃げた……とか言っていたような。

「も、もしかして…逃亡したお姫様ですか？」

「……無礼者。と、言いたいところですが事実です。逃亡者と共にはお嫌ですか？」

怪訝そうに、でもどこか寂しそうに、その深緑の瞳は俺を見据えた。

何か深い事情がありそうなのは、誰が見ても一目瞭然だ。

「いや、そうじゃなくて……。これ、洋服。」

「……え」

「その服じゃすぐにバレると思うんで、この服をあなたに貸します。」

「……。」

きょとんとするエリーゼさんを気にせず、俺は買ったばかりの洋服のタグを急いではずして、彼女に押し付けるようにして渡す。

そして、相手の言葉を待たずに背を向け、目を閉じた。

「俺、見えないように後ろ向いて目をつむってますから、すぐに着替えて下さい」

しばらくの沈黙。

エリーゼさんは察してくれたようで、受け取った洋服をぎゅつと握りしめると、深くお辞儀をしたようだ。

「ありがとうございます、この恩は忘れません。」

……。

ありさと一緒に買った服、役に立ってよかったけど……。
本当にごめんな、ありさ。

「お待たせしました。」

でも俺、ここに居るエリーゼさんが、ありさに見えて仕方ない。

「さあ、時間ありません。急ぎましょう」

ごめんな、ありさ。

……。

十分ほど走っただろうか。

命がかかっているかもしれない、と思ったら、上がつてしまっている息のことなど構わなかった。

「はあ、はあ、ここまでくれば……。あそこにちょうど宿もありますね、すこし様子を見ていただませんか」

宿についた。当然、エリーゼさんも肩で息をしている。

もう夜も遅い。

部屋があいているかは神頼みだったけど、奇跡的に一部屋確保することが出来た。

男女ということもあり、本当は二部屋あいていればよかったけど、俺たちは構わずにチェックインすることにした。

チェックイン……って、言わないか。

——あ……でも、宿代……あるわけないんだよな、どうするか

そう思つて俺は顔をしかめる。

「随分とけつたいな恰好をしているねエ……ここの辺の人じゃないんだろう？」

宿主は、俺の服装と今まさに浮かべている複雑そうな顔を見るなり、察してくれたようだ。エリーゼさんは俺の方に向き直つて微笑むと、宿屋の主に頭を下げる。

「申し訳ありません。今日のところは、この宝石を宿代とさせて頂けませんか」
そう言つて、緑色に光る綺麗な宝石を宿主に差し出した。

「まあ、ここらは滅多に公人が来ることもないさね、ゆつくりしていきな。」

「エリーゼさん、その……すみません、俺の分の宿代まで……」

「構いません。いずれにせよ、私も和国の通貨は持ち合わせていませんでしたから」

「そうか……ここは、和国つていいのか。」

「エリーゼさんの言っていた、ラルゴ王国とは違うんだな……」

そんなことを考えながら、通された部屋の布団に視線をやる。

しかし、その寝床のあまりの小ささに愕然とした。

どうする？

こんなに綺麗な人と同じ布団で寝るなんて、緊張して一睡もできる気がしないんだけど。しかも狭い。くっつかざるを得ない。

エリーゼさんは俺の様子を気にも留めず、その小さな布団に静かに入った。

そして、まるで来ないのかと言わんばかりに俺を向き直る。

どうする……？

「エリーゼさん……あの、俺は床で寝るんで布団使ってください」

咄嗟に出た言葉。

エリーゼさんはきょとんとすると、優しく微笑みながら手招きをした。

「一つでも布団があれば充分です。床は冷えますから、あなたもこちらに来てください」

「でっでも……男女だし」

俺はつくづく情けない男だ。

エリーゼさんはいそうですかと言わない事くらい、少し考えればわかるじゃないか。

しかしそんな発言をしてしまった俺に、エリーゼさんは嫌な顔ひとつせず、諭すように叱ってくれた。

「この際、男女なんて言っている場合でしょうか？体調を崩す方が問題があると思いますけど」

「……そう、ですよね」

……折れるしかない。

心の中で、感謝の気持ちと心配や懸念の感情が渦巻くが、そうも言っていられない。

エリーゼさんの言う通りで、俺が体調を崩して足を引っ張っては元も子もない。

そもそも、ここがどんなところなのかも、何をすれば帰れるのかも、わからないのだから。

「積もる話もあるでしょう。温かい布団の中で、ゆっくり話しませんか」

……失礼します、と声をかけて恐る恐る布団の中に入る。

エリーゼさんにはこつと微笑むと、掛け布団を俺に静かにかぶせてくれた。

それから俺は、エリーゼさんの隣でゆつくりと語り始めたんだ。

俺には、ありさという幼馴染がいること。

ありさと買い物から帰ってくる途中に、光に襲われたこと。

その光は、宝石が放ったものだという事。

うんうんと優しく頷いてくれていたエリーゼさんだったが、俺のその発言を聞くなり、突然怪訝そうな顔をした。

「その宝石……、角度によって輝き方が変わりましたか？」
え。

「……よくわかりますね」
もしかして、やつぱり何か関係があるのだろうか？

「やはり……。おそらくその宝石は、ラルゴ王国にしかない、ローレッタです」

まるで苦虫をかみつぶしたような顔で、エリーゼさんは小さく俯いた。

——え……？　もしかして、ヤバイ？

「ローレッタ……？　ローレッタって、エリーゼさんの苗字と同じ……？」

「ええ。ローレッタは光の石と名高い大変希少な宝石で、扱えるのはラルゴ王国のローレッタの血族のみです。ローレッタの血族は、生まれた時に自分の分身として、ローレッタを握りしめて生まれてきます。ローレッタの血族以外の人間がローレッタに触れると、時空のひずみに飲み込まれてしまいます……。」

——今……なんて言った？

「時空のひずみ……！？」

「恐ろしい言い方をしましたが、要するにローレッタは時空を飛び越える力を持っています。ですから、にわかに信じがたいかもしれませんが、あなたは異空間から飛ばされてきたのですよう」

——やっぱり、ここは異世界なのか。

もしかするとヨーロッパだったりしないか……と思った俺がバカだった。
そもそも言語が通じる時点でヨーロッパなわけあるかよ。

ん……でも、どうして俺だけ飛ばされた……？

「ちょ、ちょっと待ってください！ そしたらありさは……？」

「……わかりません。そもそも、何故ローレッタがそちらにあつたかさえもわかりませんから……」

「
エリーゼさんにもわかるはずなのに、何故ありさの質問をしたんだろう。」

俺は自分が焦っている事に呆れながら、それでもこのどうしようもない感情をエリーゼさんにぶつける事しか出来なかった。

「……エリーゼさん、俺……どうしたらいいんでしょうか……」

——なんで、俺たちなんだろう？

「……。」

長い沈黙。

それを破ったのは、あまりよくない知らせ。

「ひとまず、帰れないと思ってください。……でも」

「……でも？」

「定かではありませんが、ありささんに会うことはできるかもしれません」

「……！！ 本当ですか？！」

——ということとは、ありさも飛ばされた……ということか？

「ええ。同じ時間に、ローレッタの光に巻き込まれたんですよね？ 触れたのはありささんな

ら、もしかすると……ラルゴ王国に飛んでいるかもしれません」

「………良かった」

今、なんで俺……安心したんだ？

もう一度ありさに会えるかもしれないから？

それとも、孤独じゃないから？

いずれにせよ、危険なことには変わらないのに……

なんで……俺。

ぐるぐると考えながら俯いていると、エリーゼさんは俺を励ますように背中を軽く叩いて、まっすぐ俺を見つめた。

「ひとまず、私たちが生きている限り、その可能性も追い求めることが出来ます。必ず、死なずにラルゴ王国まで戻りましょう。なんとしても」

そうだ……落ち込んでいる場合じゃない。今ネガティブになつてどうする。

俺は、まるで重力に逆らえなくなったかのように感じる心臓の重みをはねのけるように、静かに、強く返事をした。

「……そうですね……!!」

……。

深夜。

目まぐるしい今日の出来事を思い返しては、押し寄せる不安と葛藤していた。

部屋の中は目を開けても何も見えないくらいには真っ暗で、恐らく朝にはなっていないだろうということしか分からなかった。

こんな状況で、眠れるわけないよな。

エリーゼさんとは背中合わせで横になっているが、彼女はもう既に寝てしまったのだろうか？

いい加減考えるのをやめて目を閉じないと、本当に迷惑をかけてしまう。

そう思っ、目を深く閉じたときの事だった。

耳に、温かい吐息を感じる。

「ちゅ……はむ。ちゅ……。本当は……起きていますよね……？」

——……エリーゼ、さん？

言葉に出そうとしたけど、動けない。

するとエリーゼさんは、その様子を見透かしたように続ける。

「ふふ……良いですよ、寝たふりしてて……ちゅ、ちゅ……。今日だけ……今日だけで、いいです……。こうして、あなたのぬくもりを感じれるだけで……良いです……。」

エリーゼさんはゆつくりと、でもどこか寂しそうに俺の耳にキスをし続けた。

何か、何かかける言葉は……。

寝たふりをしながら必死で考えるけど、何も思い浮かばなくて。

俺は、エリーゼさんの言葉を待つことしかできなかった。

「ちゅ、れる、ちゅ……。あなたは……私の婚約者に、そっくりで……。」

もう会えない……私の婚約者に。だから私は……今日だけ、貴方の思い人になります。

ありささんになります。 私は……ありさです。ね……好き。ちゅ、ちゅ……」

……そんなこと。

そんなこと、言わないでくれよ。

「ん……ちゅ。好きだよ。愛してるよ……。ん……んっ。ちゅ。す……。き。」

——「俺」を、見てくれよ。

あなたは、ありさじゃなくて……「エリーゼさん」だろ？

でも……そんな事、言える立場じゃない。

俺は助けられたんだ、エリーゼさんに。

今日は……今日くらいは、俺はあなたの婚約者になる。

な？ エリーゼさん……いや、ありさ。

「起きてくれた……？ ふふ……もう一回、目を見て言うね。好き……」

キスなんて、したことないけど。

今しか、ないよな。

俺は言葉を何も発することなく、ただひたすらに彼女を求めた。

エリーゼさんもまた、その想いを返してくれるように深くキスをしてくれる。

「んっ！ちゅ……れる、ちゅ、ああんう……ちゅ。あむ、ちゅ……れる、ちゅ……」

もつと、舌を……絡ませて……？ ん。ちゅ……好き。好き。ちゅ……あむ……ふは……

あむ……ちゅ、ぢゅず……」

好き、という言葉と共に、何分間こうしていたんだろう。

「大好きだよ……ちゅ……。もつと、気持ちよくなろ……」

そう言って、エリーゼさんは再び俺の耳を優しくキスした。

「もつと……ぞくぞくさせてあげるね……。ちゅ……はむ……はむ、あむ……」

――。

「とろんとしたお目目……。そんなに気持ちいいの……。？　嬉しい……。私の事……。もつと、好きになつてね……。ちゅ……。ちゅ、ちゅぱ……。ちゅ」

沢山、沢山愛情を感じた。

でも、それは……。その相手は「俺」じゃない。

――「ごめん、やつぱり。」

「ん……。え？　いや、私はエリーゼではなく……。今はありさで……。ん……。あ……。あつ、くふ……。っ」

――「貴女」を見たいんだ。

「乳首……あ、だめです……今は、私があなただけ……気持ちよく……ッ。 ひゃ……ふ……ん、
んん……」

——だから、

「……あ、つふふ。 私の事、エリーゼさんって呼ぶの……あなただけ、なんですよ。 ふふ。
ありがとう……好きです。」

——俺の事、

「んっ……つあ、あん……。 あ、おま×……。 さ、触ったら……。 だ、めッ。
ん、つちゅ、ちゅぶ、れる、ちゅぶ……。 だめ、あふっ……。 あ、あふ……。 んっちゅ、んんっ
……。 あんっ、ちゅ、ちゅぶ……。 っ」

——“俺”の事を見てくれ。

俺たちは、時間を忘れて愛し合った。

婚約者とありさではなく、“俺”と“エリーゼ”として。

何度も繰り返し愛し合っていたら、いつの間にか眠りについていた……—。

窓から差し込む木漏れ日と小鳥の鳴き声が、まるで朝を運んできたかのようだ。

まだ重い瞼をこすりながら布団から起き上がる。

すると、隣で眠っていたはずのエリーゼさんもまた、眠たそうに俺のほうをぼんやりと見つめた。

布団の揺れで彼女を起こしてしまったのだろうか。

「すみません、起こしちゃいましたか？」

「いいえ。もう朝ですから、起きないと……」

エリーゼさんは、ふふと微笑んでからひとつ大きな欠伸をすると、小さく頷いてから起き上がった。

その姿を見てどこか愛おしく感じてしまうのは、昨日の夜のせいだろうか。

——そういうことに、しておこう。

しばらくして、俺たちは宿を後にした。

——。

「まずは、国境を目指さなとラルゴ王国には戻れないのですが……地図がないことには始まりませんね……」

……そうだよな。

まず、ここが和国という場所である、ということしか分らない。

エリーゼさんの住む国ではないのだから、地図があっても少し怪しいくらいだが……。

「おや、何かお困りですか？」

道行く商人が、路頭に迷っている俺たちに声をかけてくれた。

どうやら、地図を売ってくれるらしい。

和国の通貨を持ち合わせていない俺たちだったが、エリーゼさんの持つ宝石と地図を交換してもらうことが出来た。

……なんだか、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。この恩は必ず返さないと。

「すみません……二度も。 あんなにきれいな宝石……、よかつたんですか……？」

「今は、正しい道順を知るのが最優先ですからね。装飾品が役に立ってよかったです。」

そういつて優しく微笑むエリーゼさん。

顔立ちは本当にありさそっくりだけど、言葉遣いも表情も全然違うんだな…そりやそうか。

「ここから北西の方角にずっと進んだところに国境があるようです。国境には、ラルゴ守護

騎士団の騎士もいますから、私の顔を見れば通してくれるでしょう」

俺を安心させるようにそう微笑むエリーゼさんだけど、内心は物凄く心配に違いない。

今の俺にできることってなんだ？

考えろ、考えろ。

……そうか。

俺には、何もない”んだった。

せめて…せめて、何か…。

そうだ。

彼女の心の傷を、少しでも癒せたら……」。

「考え事ですか？　今は歩くしかないのですから、前を見て歩いてくださいね」

俯いてぐるぐると思考を巡らせていたら、エリーゼさんに見透かされた。

そりやそうだよな……突然黙ったら気づかれるに決まってる。

「すみません……。……あの、俺、」

言いかけた束の間、遠くから素早く誰かが走ってくる足音が聞こえた。

「……しまった！」

エリーゼさんは何かを察したように振り返る。

俺も聞こえた足音の方を振り返ると、あの時の派手な忍者のような身なりの女がいた。

「やあゝっと見つけた♡ エリーゼ姫ちゃん、逃げ出したらダメじゃない♡」

背筋が凍って、息をのんだ時だった。

その忍者のような女は、即座に魔法のような黒い闇を手から放つ。

「ダークレイン！」

——終わった。

そう、思った。

「……レイジンググリベレート！」

しかし、エリーゼさんはその魔法が来る事を予測していたかのように、素早く盾のような光を繰り出した。

防御魔法……と言うものだろうか。

エリーゼさんの光の盾によつてかき消された、黒い雨のような闇。

全て防御したことを確認し終えると、エリーゼさんは怒声をあげた。

「オトハ！ 慎みなさい！」

「おゝさすがすがすが。その俊敏な動き、褒めてあげるわ♡」

しかし、ひるまない忍者。オトハ……というのか。

怯えている場合じゃない。

頭ではそう思っている、この魔法が飛び交う場所で平然としていられるか。

その一瞬で悶々としていると、エリーゼさんは深く息を吸い込み詠唱を始めた。

「魂の輪廻に導かれし無垢な羽根よ、無慈悲なる制裁を与えたまえ……ブルームスピリット！」

エリーゼさんが言い放つと、天使の羽根のような光の束が舞った。
その光は、どこかローレッタの光に似ている気がする。

「ダクテッドアラン！」

光の美しさに少しだけ見惚れていたその時だった。

オトハはドームのような防御魔法を繰り出し、大技にも見えたエリーゼさんの魔法をいとも簡単に回避したのだ。

「くっ……！」

「わかってるのよ！あんたのやり口は♡ ……はあっ！」

「しまった……！ くっ！」

——刺さ………つた………？ 嘘だろ！？

オトハの投げた苦無のような短剣が、エリーゼさんの右足の足首辺りに突き刺さった。その光景は、痛々しくて見ていられない程だ。

どうする、助けを呼ぶにも時間がない。

その様子をドヤ顔で見るなり、オトハは魔法を繰り出す。

背筋が凍りつくような文言も添えて……」。

「これで終わりにしてあげる……♡ ローリアスブレイカー！」
怖い。とても怖かった。

——でも

——エリーゼさんをかばわないと。

考える間もなく、俺の身体は前に出ていた。

「……！」

被弾した瞬間、エリーゼさんは驚いた顔で俺を見る。

おどろおどろしいような黒い闇が目の前を覆った。

明らかに被弾したはずなのに、その割には痛みを感じないな…。

しかし、一ミリも動けそうにない。

「あらあら。エリーゼ姫の騎士ごっこ？ 武器も持たずにかわいそう。エリーゼ姫と一緒に処分しちゃわないとダメかしらね」

「無礼者……！ こうなったら武力行使しかありません」

エリーゼさんは、キッとオトハを睨む。

その視線からは紛れもない殺意を感じた。

しばらくして、エリーゼさんはまた大きく息を吸い込むと、まるですべてのマナを放出するかのような、大きな光の魔法を放った。

「……………エンドレスゲート！」

その光はすさまじいスピードでオトハに向かっていき、

防御をさせないというエリーゼさんの強い意志を表しているかのようにだった。

「……しまった！」

――。

被弾したオトハの姿は消えていた。

これは……瞬間移動の魔法だったのだろうか。

「はあ……はあ……大丈夫ですか？ 私の声が聞こえますか？」

大丈夫です聞こえます……って、

……声が出ない。どうして。

聞こえているのに声が出せないし、動くことも出来なかった。

「オトハのデバフ魔法をもらに受けたせいですね……。申し訳ありません、私が油断したばかりに……」

——う、動けない……。

「……大丈夫。デバフ魔法は長くは続きません。じきに動けるようになります。……本当は解除して差し上げたいのですが、マナを使いすぎてしまつて……」

——エリーゼさん……足の怪我が……

俺の視線が届いたのか、エリーゼさんは自らの右足をちらりと見下ろすと、思い出したように苦笑した。

「あ……そういえば、私の足にオトハの苦無が刺さりましたね。痛いと思つてたんですが、それどころではなくて……。ヒールの魔法も……今はマナ不足で使えないので……。止血をしなくちゃ」

—。

エリーゼさんは手際よく止血を終えると、一つため息をついた。
すると俺に向き直るなり、にこつと微笑む。

「そろそろデバフ魔法が切れる頃です。動けますか？」

「……あ。本当だ。何もなかったかのようだ……」

「こういった、動きを鈍くするようなデバフ魔法を使って仕留めていくのが、オトハの戦術です。私が和国に連れ去られた際も、騎士たちが同じ目に遭いました。」

……また、その偽物の笑顔。

「……つらかった、ですよね」

「……え？」

俺は、どう言葉をかけてあげたらいいんだろう。

長い沈黙。それを破ったのはエリーゼさん。

「……つらくなかったと言えば、嘘になりますよ。ですが」

「……」

「今は割とつらくありません。なぜでしょうね？ あなたが隣にいて下さるお陰でしょうか」

ふふつと照れたように笑ったエリーゼさんの綺麗で優しい深緑の瞳は、俺のネガティブな気持ちも、迷いも、すべて吸い込んでくれるかのようだった。

これが、統治者であり、姫というものなのか。

だとしたら、俺は姫というものを勘違いしていたのかもしれない。

想像上の……そうだ、机上の空論とはまさにこの事か。

姫というものが、こんなに強くて優しく、そして想像を絶するほど覚悟のいるものだったんだなんて……。

ぎゅつと力を込めた右手の拳を空中に振り下げて、俺はエリーゼさんに言い放つように言葉を吐いた。

「……俺にできることって、何があるかな……って、考えたんですけど……!!」

俺は、ただ異空間から飛ばされてきたってだけで何も出来ないただのへなちょこだ。

たまたまあなたに洋服を貸して、助けたつもりになっているでくのぼうだ!

でも! 俺にできることがあると信じてる。」

頑張れ、俺。

「——それは……! あなたの心の傷を癒すことだ」

「……心の、傷」

——俺は、守りたい

「ああそうだ! たったそれっぽっちかもしれない。俺も自分の事、なんでこんなことしかできねーんだよとか情けなく思う。でも……進学先の学校が心理学部だからとか、そういう事

は関係ない！ただ、一生懸命……あなたの事を癒したい。魔法とかは使えないから、物理的じゃないけど……」

——貴女の、笑顔を。

「……でくのぼうだとか、たったそれっぽっちだとか、私はそうは思いません。

あの時、あなたが洋服を貸してくださらなかったら、私の命はここになかったかもしれない。そう思うと、あなたの勇気のある行動には、感謝をしてもしきれません」

エリーゼさんは俺の手を取り、目を細めたかと思えば、そのままぎゅつと臉を閉じた。まるで、祈りをささげるかのように。

そして、しばらくしてゆつくりと口を開く。

「ありがとう……」

——。

俺は思わず、エリーゼさんを抱きしめた。

命は、簡単なものなんかじゃない。
時間は、無限にあるわけじゃない。

ここに居ることも奇跡なのだという事を、
強く刻むように感じた。

第二章 お姫様の最後の晩餐

俺たちは、明くる日も明くる日も、地図を頼りに国境までの道のりを歩き続けた。

こんなに長い距離を歩いた事なんて生まれて初めてだったけど、不思議と身体は動いた。

身体がちゃんという事を聞いてくれるのは、

そこに……毎晩の楽しみがあつたから、だろうか。

「もうすぐ、国境が見えそうですね。ラルゴ王国まであと少しですが……今日はもう夜も遅いので、近くの宿に泊まりましょう」

軋む木の扉をゆつくりと開けると、気前のよさそうな明るい宿主が迎えてくれた。

エリーゼさんは、いつものように宿主に交渉しようとする。

しかしここは国境が近い事から、ラルゴ王国からの旅人も受け入れることがあるのだとか。そういうった事情もあり、宿主の厚意から、ラルゴ王国の通貨での支払いをさせてもらえた。

俺は、その事実を知るなりエリーゼさんに一つ頼み事をしたんだ。
値は張るかもしれないけど、一番奥の部屋にしてもらえないか、と。

——…。

「すみません、無理を言って」

「構いません。ですが、どうして一番奥の角部屋を……？」

——だって、こうできるのは……多分もう最後だから。

なんて、言えなかった。

ラルゴ王国に戻ったら、エリーゼさんは姫。

そして俺はただの一般人だ。

もう、貴女と身体を重ねられるのは今夜で最後だろう。
こんな一般人が、姫様と寝てただなんて知られたらどうなることか。

でも、きつと一生忘れられない。

貴女の、肌の温かさを。

俺は、きよとんとするエリーゼさんを構わず布団に押し倒し、かぶさるように上に乗った。

「俺が、今日を……忘れられない夜にします」

——好きです、エリーゼさん。

ひとつひとつの言葉をしっかりと口に出して伝えると、

エリーゼさんはそれを受け入れるように俺にキスをした。

どのくらいの時間、キスをしたかわからない。

どれだけ唇を重ねても満足することのないこの気持ちを、俺はすべて、今夜、エリーゼさんにぶつけようと思った。

「好きです……あなたのそういうところ」

言葉とは反対に、エリーゼさんはどこか寂しそうにしているように見えた。

彼女も、こういうことが出来るのは今日で最後だということを察しているから……だろうか。
或いは……。

――。

その寂しさをひとつひとつしつかりと塗りつぶすように、俺たちは愛し合った。

俺の体力が続くまで、ずっと……ずっと愛し合っていようと思ったけど、

現実とは非情であり、体力が尽きるよりも朝になる方が早かった。

「朝に、なっていましたね……」

窓からさす光を見るなり、エリーゼさんはあはたと苦笑をした。眠れなかったのに、不思議と瞼は重たくなかった。

エリーゼさんもあまり眠くなさそうな様子だ。

——俺たちの最後の夜が、終わったんだ。

呆然としている俺を氣遣ってか、エリーゼさんは言葉が続けた。

「私は、ラルゴ王国に戻ったら、王族としての位に戻ります。こうしてあなたと旅が出来て、本当に良かった。背中を預けたのがあなたで、本当に良かった」

エリーゼさんは、俺が渡したありさの服ではなく、最初に自分の着ていた服を着る。その様子を見て、なんだか力が抜けていった。

おかしいな……視界って、こんなに滲んでいたっけ？

「……泣かせてしまって、ごめんなさい」

まばたきをしたら大粒の涙が零れ落ちて、はつと我に返った。

別れは、いずれ来ると分かっていたんじゃないか。

最初の目的から大きく気持ちが逸れてしまっているということは、自分が痛いほどよくわかっている。

…そうだ。俺は、ありさともう一度会うためにラルゴ王国を目指したんじゃないか。

ありさともう一度笑いあうために、迎えに行くと決めたんじゃないか。

旅をしているうちに、俺の心はすっかりエリーゼさんに向いていた。

俺って、最低だな……。

——本当に、最低なのか？

「ありさんのこと、考えているんですよね？」

エリーゼさんは、恐る恐るだが核心に触れるように俺に訊ねた。

なんでも彼女にはお見通しってことか。

「すみません。色々考えちまつて……。ありさを迎えに行くために一緒に旅をしたのに、なんか……。この旅が終わるのがすげー寂しくて……。俺の心が、まるで自分のものじゃないみたいだ……。とさえ、思ってしまうんです」

長い沈黙。

エリーゼさんは切なそうに目を細めると、そのまま目をつむって深く頷いた。

両者とも口を開かないでいると、木の軋む扉の音が沈黙を破った。

「すいませんね、そろそろ清掃の時間なんで……」

――。

宿主の申し訳なさそうな顔を見るなり、俺たちは慌てて宿を後にする。

半強制的に、俺たちの関係は終わることになった。

何も言葉を交わさないまま、国境までの道を歩く。
もう、ラルゴ王国はすぐそこだ。

「…あの。気持ちばかりですが、ラルゴ王国にいたら住む場所を手配しますね。それから、」

——それから？

「あなたを、英雄として称えます」

「え、英雄……！？ 俺、そんな……何もしないですよ」

俺はただ、エリーゼさんに洋服を貸しただけだ。

そんなんで称えてもらえるなんて虫が良すぎる。

でも、俺の言葉を聞くなり、エリーゼさんは少し寂しそうな目をした。

深呼吸をして、もう一度俺に凛々しく告げたんだ。

「いいえ。あなたは私の命の恩人ですから」

——命の、恩人

その言葉を聞いて、はっとした。

そうだ。俺は、あの時誓ったじゃないか。

もう、迷わないと。

重力に逆らえなくなつたかのようなあの心臓の重みを跳ねのけた、凛々しい言葉で。

——『生きている限り、その可能性も追い求めることが出来ます。』

——『必ず、死なずにラルゴ王国まで戻りましょう。なんとしても』

俺は深く頷いて、エリーゼさんの手を握ると、堂々と国境のほうへ歩き出した。

——。

ラルゴ王国と和国の国境。

それは、西洋風と和風が融合したような、そんな紋章の描かれた大きくて豪華な建造物だった。人為的に定められたであろうこの国境は、広くて高い塀がずっと線のようにして両サイドに続いている。

「ここが……国境」

「はい。ここは、私の事をよく気にかけてくれるラルゴ守護騎士団の団長であるフレデリカもよく様子を見に訪れます。国境の管理は、和国側がラルゴ王国側にやや任せきりな部分もあるため、恐らく話をつければあなたも難なく入国できると思います。」

エリーゼさんは俺を安心させようとにこっと微笑む。

……その様子を見た通行人の男女二人が、まるで何か嫌なものでも見たかのような顔をしたかと思えば、後ろ指をさすかのように、明らかにこちらにも聞こえる声量で陰口を言った。

「あれって、エリーゼ姫のコスプレかなにか？」

「最近のエリーゼ様って下品だよな…。なんであんな姫様のコスプレしたがる人がいるんだろ
う……」

——下品？ コスプレ！？

俺は怒りでその通行人ペアに殴りかかろうとした。

すると、エリーゼさんはぶんぶんと首を横に振り、任せてと言わんばかりに俺の肩をぽんと叩くと、通行人ペアに話しかけたのだ。

「もしもし、そこのお二方。私はコスプレではなく、紛れもなくエリーゼ・ル・ローレッタです。下品……というと、何かお気づきのことがありますか？　しばらく王国を留守にしているもので、変わったことがあるなら教えて頂きたい」

.....。

しばらくの沈黙。

通行人ベアは顔を見合わせると、恐る恐るだが、本当に嫌なものを見るような目でエリーゼさんをもう一度見る。

すると、物言いたげにしていた女性のほうが、思いもよらない発言をしたんだ。

「あなたが本物のエリーゼ様なら、言わせてもらいたいことがいっぱいあるんだけど……。
なんであんな偽者が現れてるのに帰ってこようとしなわけ？ ラルゴ王国、完全に終わつたよ。だから私たち、和国に移住する予定なの」

——は……？ 偽者？

何もわからない。

しかし、なんだか嫌な予感だけが頭をよぎる。

もしかして、エリーゼさんの偽者……って、

ありさ……？

「申し訳ありません。どのような理由であれ、王国を空けてしまった事は紛れもなく私の責任です。」

「いや、待ってください！ エリーゼさんは攫われて、一生懸命帰ってきたところなんだ！ 責めないでくださいませんか！」

深々と頭を下げるエリーゼさんに、俺はすかさずフォローをいれる。

しかしそのフォローも虚しく、通行人ペアは冷ややかな目を俺たちに向けながら去っていつてしまった。

——……一体、何が起こってるっていうんだ……？

「エリーゼさん、なんか……すごく嫌な予感がします。真相がわかるまで、ありさの服をもう一度着ていたほうが良い気が……」

しばらくの沈黙。

エリーゼさんは俯くと、しばらくして首を縦に振った。

その様子は、こんなじやダメだ、と自分を鼓舞しているように見えた。

「……その方がよさそうですね。幸い、何故か国境が解放されているようですから……、どのような見た目でも入国ができそうです」

エリーゼさんは弱弱しく微笑むと、昨日まで大切そうに着ていたありさの服を握りしめ、関係者専用と書かれた部屋に入っていた。

国境に騎士が誰もいない事から、関係者専用の部屋にも誰もいないと読んだのだろう。

しばらくすると、着替えを終えたエリーゼさんが部屋から出てきた。

「お待たせしました。ラルゴ王国へ入国しましょう」

俺たちは、走って国境をくぐった。

――。

ラルゴ王国。

西洋風の綺麗な街並みと、そびえたつ大きな白いお城が美しい場所だった。

しかし、初めて来る場所だというのに、何かひどい違和感を感じる。
そうだな。

——人が、誰も歩いていない。

「エリーゼさん、普段からこんなに人がいないもんなんですか……？」

「……いいえ。こんなにも静まり返っていた事など、過去に一度もありません」
何か酷い流行り病でパンデミックでも起こっているのか？

この異様なまでの様子は、そう連想してしまうほどだ。

俺は、先ほどの通行人が言っていた言葉を思い出す。

「『最近のエリーゼ様って下品だよな……』」

「『なんであんな偽者が現れてるのに帰ってこようとしてないわけ？』」

「『ラルゴ王国、完全に終わったよ。』」

下品な偽者が、ラルゴ王国を終わらせた……？

嫌な予感しかない。でも、もし偽者があいつなのだとしたら、下品だなんて形容されるにはあまりにも相応しくない。

俺の知っている姫沢ありさは、明るくて元気が良くて少しからい上手な、とにかく優しい女の子だ。

それを下品だとかぬかす奴がいるならば、どうかと思う。

でも、偽物が突然現れるだなんて……タイミングが良すぎやしないだろうか。

ぐるぐると思考を巡らせていたが、真相を知るまでは永遠に埒が明かない事を察し、大きなため息をつく。その俺の様子をちらりと横目で見たエリーゼさんは、苦笑をひとつ浮かべると、目を細めて俯いた。

そして、何か決意を固めるように目を閉じたかと思えば、そのまますぐに空を見上げ、俺の方に向き直る。

「急いでお城に向かいましょうか。このままここに居ても埒が明きません。」

どこか冷たく、小さく震えたような声でエリーゼさんは俺にそう言い放つ。

その様子から、見えない何かに打ち勝たないと、という強い意志を感じた。

「……道を案内してください。俺も一緒に走ります。」
――。

俺たちは、お城までの道を走った。

上がっている息なんて、構わず走り続けた。

妙な既視感。そうだ、エリーゼさんと一緒に逃げるときも同じように走った。

折角ラルゴ王国まで無事に帰ってこれたというのに、こんな事になっているだなんて皮肉にも程がある。

俺は、その残酷な歪んだ現実をなんとか元に戻さないとけない。
そんな使命を感じていた。

たかだか運よくエリーゼ姫と時間を過ごしただけの異世界人が、とか言われればそれまでだ
けど。そこに、強く心が動くものがあつたのだから――。

大きくそびえたつ、真つ白なお城。

普段なら、お城の入り口には、ラルゴ守護騎士団の騎士が見張りを交代で行っているはずだ
とエリーゼさんは言う。

しかし。

「誰も……いませんね」

俺とエリーゼさんは肩で息をしながら、本当にただ事ではないのだと察した。

恐る恐る、お城の入りの大きな扉の取っ手部分に手を伸ばす。

きつと開かないだろう。開かなかったら別のルートを探さないといけないな。

そう諦めてはいるものの、精一杯の力を込めて扉の取っ手を押し込んだ。

しかし、その扉は一切施錠などされておらず、いとも簡単にギギギという音を立て、あつけなく俺たちの通行を許す。

「開くのかよ……。鍵、かけてあるかと思った。」

「おかしい……。緊急事態なら、普通は施錠してあるはずです。誰か、騎士団の者がいれば話が聞けるのですが……。そもそも見張りがいない時点でお城にも何らかの事情がありそうですね……」

不安そうな深緑の瞳には、お城に展示されている大きな虹色の宝石の綺麗な光の反射が映っている。本当なら、安心したいはずだよな……。

「エリーゼ様……？エリーゼ様ですか？」

どんな言葉をかけたらいいだろうか、そうぐるぐると考えていると、彼女の名を呼ぶ声が聞



こえた。

エリーゼさんと俺は、声が聞こえた先の斜め前の階段を見上げると、そこにはいかにも重症の傷を負った青髪の騎士のような女性がいた。

その声の持ち主は、松葉杖のような支えを右手に持ち、左足に大量の包帯を巻いている。

同時に左腕も骨折をしている様子で、三角巾で首から左腕を吊るしていた。

その様子を見るなり、エリーゼさんは急いでその騎士の女性の元へ駆け寄った。

「フレデリカ……！ その怪我は一体どうしたのですか……！」

——フレデリカ。確か、よく和国とラルゴ王国の国境の管理に訪れるという、ラルゴ守護騎士団の団長……と言っていたな。

国境をくぐる際にエリーゼさんが言っていたのはこの女性のことだったのか。

ぼんやりと記憶を整理していると、フレデリカはエリーゼさんに深く敬礼するかのように目を閉じて頷いた。

「エリーゼ様。あなたが本物のエリーゼ様だという事は私はすぐにわかりました。

私の力が及ばなかったばかりに、このような事態になってしまい大変申し訳ございません」
「フレデリカ……どういう事ですか？」

自身の負った怪我については言及することなく、フレデリカは話を続けた。

「一週間ほど前にエリーゼ様が攫われたと聞いて、城外での任務に就いていた事をひどく恨みました…。何故、守れなかったのだろうと。しかし後悔しても仕方がないので、誘拐の話を耳にするとすぐにお城に戻りました。私がお城に戻れたのは、エリーゼ様が誘拐に遭われてから三日ほど経っていた頃かと思います。その頃、以前より闘病していたルド王の容態が急変し、そのまま亡くなれました…」

「え……お父様が、亡くなったのですか」

「…はい。エリーゼ様が不在の中ではありますが、私が代理で葬儀の手配を致しました…。

王族の方が不在になったラルゴ王国はこのままだとうにかなってしまう、と私はただ焦りを感じていました。すると、エリーゼ様によく似たお嬢さんが、お城の外壁付近を歩いていたのです。とても困っている様子でした。私は急いでその女性を保護すると同時に、一時的にエリーゼ様の代わりを務めてもらえないか、と提案しました」

——絶対でありさだ。

「エリーゼ様の代わりになる事を、快くその女性は受け入れてくれました。これで、一時的にでも国民の心配は薄れる。そう思いました。……しかし、数日もしないうちに、何者かにお城は侵略されました。」

フレデリカが一つ一つの出来事を思い返すようにじつくりと詳細を連ねてくれたが、俺の不安は高まっていくばかりだ。バクバクとうるさく音を立てる心臓の音がやかましい。

「フレデリカ……ひとまず、貴女の命が無事で安心しました」

「それで……ありさはどうなっただんですか！」

エリーゼさんの発言を気にすることなく、フレデリカに迫るように質問をした。

エリーゼさんは驚いた様子で素早く俺に向き直ると、宥めるような様子で俺の背中をさすってくれた。俺は、あまりにも辛辣な顔をしていたようだ。

フレデリカは、俺たちのその様子をばつが悪そうな顔で見たと思えば、とても言いづらそうに話を続ける。

「全力で侵略者と交戦しました。しかし、私の力ではどうする事もできませんでした……。」

「じゃあ……ありさは！？」

「……。」

長い沈黙。

決してフレデリカのせいではない。

守ってくれようとしたから、こんなに大怪我を負っているんだ。

頭ではわかつている。わかっているが、目の前の騎士を責めることでしか、やり場のない不安を和らげることはできなかった。

うごめく不安と、その出来事を詰問してしまいそうな葛藤で頭がいっぱいで、どうにかなりそうだった。

心配そうにその様子を見ていたエリーゼさんだったが、長い沈黙を破ったのは彼女だった。

「フレデリカ。私たちで真相を確かめる事にします。どこに向かえば良いですか？」

「……………申し訳ございません。『王の部屋』に行かれれば、すべてわかります」

「ありがとう。フレデリカ、ヒールの魔法でもその怪我は治らないのですよね」

「……………はい。この怪我は、呪いの魔法によるものです…。申し訳ございません」

深々と頭を下げるフレデリカを見て、エリーゼさんは首を横に振った。

その様子から、彼女たちの信頼関係がとても厚いものだ伺える。
エリーゼさんは、俺にアイコンタクトするように目を合わせて頷いた。
フレデリカの怪我を鑑みて、これ以上彼女を傷つけてはならないと思ったのだろう。

状況を知るために、俺たちは階段を駆け上って王の部屋を目指すことにした。

……。

普段なら、教室までの階段をけだるい気持ちで上るような俺だけど、焦燥感のあまり、まるでそんな事が嘘のように素早く身体が動く。

目の前の一つ一つの段差が、ありさをととても遠くに感じさせる。

こんな思いで階段を駆け上るのは人生で初めてだ…。

情報がなく、生きているのかさえも定かではないけど、俺はただありさが無事でいてくれる事を願って全力疾走した。

「はあ、はあ…」

焦燥感のせいで、この階段が長かったのか短かったのかすらもわからなかった。

ここが王の部屋だと言われたら誰もが納得するような、豪華な扉。

その重厚感のある扉は、その見た目から、外部の人間を拒絶しているかのようにも見えて、俺の不安を更に煽る。

肩で息をしながらその扉の取っ手に急いで手を伸ばし、押し込もうとした時だった。

部屋から漏れてきた声が俺たちの耳に微かに届く。

扉越しに聞こえるその甘ったるい猫なで声に、俺とエリーゼさんは目を見合わせた。

「ああん♡れーるう、じゆるじゆるつあん♡ れろれろされてえ気持ちいいですか？ もっとしてあげます♡ ほーらあ、こっち見て下さいね♡」

その声は、間違いなく俺のよく知る幼馴染……

——姫沢ありさのものだ。

…嫌な形で安否を確認してしまった。

ひとまず、ありさは生きている。

しかし、嫌な予感と不安は別のベクトルで大きく膨れ上がっていく。

先程から扉の取っ手部分にかけている手を、恐怖で前に押し込む事が出来ない。
二の足を踏んでいるうちに、扉越しの甘い声はエスカレートしていった。

「あつは♡おつきい…♡　ねえ、あなたのおちん×ん♡　私のおま×こに挿れちゃつてもお…
いいですよねえ？」

…。

俺は、右手で握りしめた扉の取っ手に、とんでもない力を加えていた。
早くありさを助けないと。

頭ではわかってはいるけれど、先程のありさの発言から、隣に男性がいる事は明白だ。

どうしたらいい、武器を持った男ならば太刀打ちできるわけがない。

ましてやそこに魔法がついていたら、今度こそ命を落としかねない。

こわばる身体。力を込めすぎていた右手はいつの間にか震え始めていた。

その様子を見ていたエリーゼさんは耐え切れなくなったのか、俺の背中を後ろからそつと自らの方へ抱き寄せると、まるで赤子をあやすかのように小さくトントンとして宥めてくれた。

その優しさは、渦巻く負の感情を浄化してくれるかのようだ。

小さくリズムよくトントンとしてくれていたエリーゼさんは、しばらくして俺の力みが緩んできた事を察すると、ゆつくりと離れた。

そして、静かに口を開く。

「大丈夫。恐らくこれはチャーム魔法の効果の一種だと思われます…」

「じゃあ……ありさは、元に戻るってことですか？」

「憶測ですが、戻ると思います。永続効果なのか時間経過による一時的な効果なのかはわからないので、必ず戻るとは言えませんが……。」

エリーゼさんのしてくれた説明のおかげで少しだけ安堵できた。

しかし、誰がなんのためにチャーム魔法なんか…。

俺が目の前扉を押せずにいると、エリーゼさんは俺の背中をぽんと叩いた。

二の足を踏んでいる俺に、喝を入れてくれたのだろう。

「確かめましょう。何が起きているのか。」

「…はい。」

意を決して、その重厚感のある扉の取っ手に再び力をこめる。

そしてゆつくりと前に押し込んだ。

扉はやや重ためのギギギという音を放ち、廊下と王の部屋を繋げる。

“王の部屋”。

きつと、本来ならば神聖な場所であるに違いない。

しかし、そんな高貴な場所で行われているその光景に、俺は目の前が真っ暗になった。

「あり…さ…？」

「ん……だあれー？ いいところなんだから邪魔しないでくれる？」

確かに、ありさはそこに居た。俺の予想を裏切るように、たった一人で。

首元に青色の宝石がついたネックレスをつけて、あとは布一枚すら身にまとわず、媚びるように腰をくねらせていた。

その姿は、目の前の大きなカメラのような機械の先の視聴者を誘惑しているようだった……。

「え、あ……ありさ、あの……」

未だに信じられない。何が起こしたらこんな事になるのだろう。

ぐるぐると巡る、整理のつかない思考。

それから、フラッシュバックするありさとの思い出。

淫猥な事とは程遠かった俺の幼馴染を、こんな姿にしてしまえるほどのチャーム魔法なんて存在するのか、という事実も受け入れられるはずがない。

立ちすくむ俺に、裸のありさはやつと言葉を放った。

「ああ、あんただったんだあ。久しぶりだね♡ 元気にしてたあ？」

まるで酩酊しているかのような回らない呂律。

こんなありさは見たことがない。

しかし、にひひつと笑うその明るくて特徴的な笑顔は、紛れもなくいつものありさだ。

速まる鼓動。

“見てしまった背徳感”と“守ってやれなかった罪悪感”が交錯し、なんだかよくわからな
いが心臓の音がやけにうるさい。

どうするべきかと、エリーゼさんに助けを仰ぐと振り返る。

すると彼女は、俺が想像した数倍、辛辣そうな顔をしていた。

「ごめんなさい。大きく気になることがあるので、席を外させてもらいますね。」

エリーゼさんは、静かに憤った様子で踵を返し、上ってきた階段を駆け下りていった。

自分とひどく似た顔をした女性がこんな姿をしていたら、憤るにも無理はない。

或いは、何か他の理由が……。

「ねえー。無視しないでよお……♡」

ありさに声をかけられて、俺は階段を駆け下りていくエリーゼさんをずっと見ていた事に気が付いた。

王の部屋はとても広く、王座と廊下までの距離は結構あつたはずなのに、振り返るとすぐ目の前にありさがいた。

近い。とにかく近い。

大きな胸、その先端に広がるピンク色の大きな乳輪に、ぴんつと効った綺麗な乳首。

ありさのその大きな胸のことは、普段はあまり意識しないようにしていたけど……

こんなに間近で、しかも布一枚まといつていない状態で目の当たりにしてしまったら、鼓動が速くなるのは必然じゃないか。

「あ、ありさ……ごめん、俺……」

上手く言葉が出てこない。

その様子を見て、何かを察したようにありさはまたにひひと笑った。

「ありさじゃないよ。私はね、エリーゼ」

——…。

凍り付く背筋。

そうだ、フレデリカが言っていた。

ありさに、『エリーゼさんの代わりになるように頼んだ』と。

しかし、エリーゼさんとしてこの機械の前で誘惑していたとするならば…。

——『最近のエリーゼ様って下品だよ……』

——『なんであんな偽者が現れてるのに帰ってこようとしなわけ？』

——『ラルゴ王国、完全に終わったよ。』

……辻褄が、合ってしまった。

「なによ。もつと私の事…見てつたら♡」

ありさは俺の首に腕を回すと、そのまま自らの方へ抱き寄せて、俺にキスをした。

あんなに言い出せなかった告白も介せず、あっけなくキスをしてしまったんだ。

大好きなありさと、何かを撮影している様子のこの機械の前で…。

「ちゅ♡もつと舌からめてえ…？ん、ちゅ♡ ほら、もつとお…♡ あ、んうつ、れる、ちゅぶ♡ あっん♡ん、ちゅ♡」

行為はエスカレートしていく。

背徳感のせいなのか、大きく膨らんでしまった股間。

密着しているありさにバレないはずもなく、ありさは察するなりいつもの特徴的な笑顔を浮かべて、俺の股間を服の上から刺激し始めた。

しばらく耐えていたが、こめかみと瞳の奥をつなぐ位置から、ぷつん、というような理性の糸が切れるような音が聞こえた気がした。

「ごめん、ありさ。エリーゼさん。」

「謝らないでよお…♡ いっぱい、エリーゼのお口で気持ちよくしてあげるからね♡」

噛み合わない会話。ありさは、何も悪くないんだ。

俺は目を閉じて、ありさにすべてを委ねることにする。

ありさは俺のズボンを手早く下すと、パンツ越しの俺の陰茎の匂いをすんすんと堪能するようにならした。充滿するオスの匂いにうっとりとしたかと思えば、もう一度鼻を鳴らし、その動作を繰り返す。

その下品すぎる仕草を見下ろしていたら、変な気持ちというものが芽生えないはずがない。

俺は耐え切れずパンツを下すと、勢いよく跳ね返る陰茎をありさの唇に突き付けた。

「口で気持ちよくしてくれるんだろ？ ほら、舐めて。」

「はあ♡ そういう俺様的な最高すぎる♡ いただきまあ♡♡」

ありさは目を輝かせて俺の陰茎にむしゃぶりついた。

ぢゅぽつぢゅぽつと下品な音を立てて、頬をすぼめながら俺の陰茎に激しく吸い付く。

時に、ぢゅぽあつと口を離れたかと思えば、すぐにもう一度無我夢中で激しく吸い付くを繰り返した。

温かく、ぬるつとした舌に包まれて、激しく吸い付かれ続ける俺の陰茎は、限界を迎えそうになっている。

「ごめん、そろそろイきそ……」

俺のくぐもった声にまた目を輝かせながら、ありさは動きを速めた。

「んふ♡ ぢゅぶつ♡ぢゅぶ♡ らして、らして♡ ん、ぢゅっずずずず♡」

射精を促すその色っぽい声で興奮が最高潮に達し、すぐに勢いよく吸われて、俺はありさの喉の一番奥で思いつきり射精した。

「んぐっ♡ ぎゅ♡ ごっくん♡」

ありさは下品に喉の音を鳴らしながら、射精したばかりの精液を飲み込んだ。

「はぁ…♡はぁ…♡ごちそうさま♡ ねえ、気持ちよかった？」

満足げに俺の顔を見上げ、にひひつとまた笑う。

その笑顔を見て、本当にありさに抜いてもらってしまったんだと再確認した俺は、ありさの目を直視できなかった。

第三章 深緑の姫君による再建の提案

なんだか…視界がかすむ気がする。 立っている足にも力が入らない。

感覚としては、立ち眩みに近い。

俺はふらつとよろけると、その場に座り込んだ。

「大丈夫？ 気持ちよすぎたのかな♡」

あはは、と笑いながらありさは機械に向き直った。

再び腰をくねらせながら、誘惑するようにウインクする。

「みんな、あのお兄さんが羨ましかったよね♡ ごめんね！ 今度はこのデイルドを使いますから、また楽しみにしてくださいね♡ ではでは、エリーゼ姫の生放送るーむ☆へお越しください、ありがとうございます♡ お相手は皆のお姫様、エリーゼでした、またね♡」

ありさは機械に向かって手を振りながら、停止するような操作をした。

俺は脱ぎおろしていたズボンとパンツを履いて、ふう、と一息つく。



強い気だるさと軽い眩暈が収まらないまま、俺はありさに訊ねたんだ。

「ありさ、なんでこんな事してるんだよ…？誰かにさせられてるんだよな？」

ありさは悪びれることなく、先ほどと同じ様子だった。

「え？こんな事って？それよりい、抜き足りないんじゃないの♡？」

まただ。またいつものその笑顔を見て、俺は再確認してしまう。

本当に、目の前にいる淫猥な女性は「ありさ」なんだと。

ありさは、先ほど止めたばかりの生放送をまた開始する。

すると、ぺこりとお辞儀をして、右手の指を二本立ててピースのようなサインをした。

「ごめんね、みんな♡ 第二ラウンドいこっか♡」

すると、柄の部分に青色の宝石が埋め込まれたデイルドを右手に持ち、そのデイルドをれろーっと舐め上げる。

その様子を見て、自分の陰茎が舐められたかのような錯覚に陥りながら悶々していると、

廊下の方から階段を駆け上がる足音が聞こえた。

しばらくすると、ギギギという重めの扉の音と共に、バンと勢いよく扉が壁に打ち付けられる音が耳を刺す。

「ありささんを解放して差し上げたい」

扉の打ち付けられる音と同時に凛々しく言い放ったのは、本物のエリーゼさんだった。

「はあ？あなた誰？しらけるから辞めてくれない？」

その大きな音と突然の宣言に、ありさはムツとしながら本物のエリーゼさんを睨んだ。

エリーゼさんはその様子に構わず、機械に向かって何かを語り掛けるように話し始める。

「すべて終わらせませう。私の手で。ですから国民の皆さんは、どうか私を信じて下さい。これ以上、偽者のエリーゼを見ないで下さい。」

一言一言しっかりと、芯があるけれど普段の優しさもちゃんと感じさせる、彼女の言葉。

深緑の瞳はまっすぐに機械を見据え、レンズの先の国民にしっかりと宣言しているかのようだった。

その様子をばつが悪そうに見ていたありさは、機械に駆け寄る。

エリーゼさんの圧を煙たがるような掌の動作つきで。

「あー…ごめんねみんな。今日の第二ラウンド配信はできそうにないので中止！ 抜き足りない人は、各々でオナニーしてね♡ ではでは、またね〜！」

ありさはそそくさと配信をとめるような操作をしたかと思えば、大きなため息をつきながらエリーゼさんに向き直る。

すると何かを諦めたような、寂しそうな目をしたんだ。

「貴女の居場所なんて、もうないですよ」

……。

しん、と、雑音さえも聞こえなくなつたような気がした。

こんなことを言われて、本当なら真っ先に怒るところだ。

しかし俺は、言葉では上手く説明できないような妙な説得力に押し負けたんだ。どうして、と質問する気も起きなかった。

それは、この状況を見て、変に腑に落ちてしまったからだろうか。

しばらく続いている沈黙が、短いのか、長いのか判断ができない。

エリーゼさんは、すうつと深く息を吸うと、静かにありさに訊ねたんだ。

「貴女は…誰かに指示されているんですよね？」

「…答えるわけないでしょ」

ありさはまた寂しそうな目をしたかと思えば、今は動作していない機械へ向き直った。いつものありさだ。頑なに拒むときは、背を向ける。

誰かに口止めをされているに違いない。

「一つだけなら、教えてあげる」

ありさは背を向けたまま、自らの胸元に光る青い宝石のネックレスを愛おしそうに両手で握りしめる。

背を向けた状態でもわかる。

その姿は、何かに憑りつかれているかのように狂気じみて見えた――。

「私は、この『キュアノス』っていう宝石を預けられたの。綺麗でしょ？エッチな配信をするたびに、どんどん大きくなっていくんだよ」

「…なんですって」

「知ってるの？なら話は早いと思うけど」

ちょ、ちよつと待ってくれよ。

『キュアノス』という聞き慣れない宝石の名、その名を耳にしたときのエリーゼさんの驚愕した表情。

決して耳にしてはいけないような、そんな言葉なのかもしれないと察した俺は、そのデイルドの柄の部分につく宝石もまた、ありさの胸元に光るキュアノスと同じものなのかと訊ねた。

するとありさは、「そうだよ」とそっけなく頷いたと思えば、もう一度煙を払うような動作をする。

「悪いけど、私はもらった部屋戻るから」

「ありさん♡」

「なあに？まだ何か用？」

「私も、一緒に活動させてもらえませんか…♡？」

エリーゼさんは、先程までの凛々しい表情からは想像もできないような恍惚とした顔で、ありさにウイंकをした。

…何が起きているのか全く分からない。

“キュアノス”がとんでもなく恐ろしいものだということしか、今の俺には理解することはできなかった。

ん？待てよ。…そうだ、あの時。

——『大丈夫。恐らくこれはチャーム魔法の効果の一種だと思われます…。』

“キュアノス”が、チャーム魔法と何か関係があるのではないか？

それならば、エリーゼさんの今の表情にも納得ができる。

しかし、この憶測がすべて正しいとしたら、今度こそ

——ラルゴ王国は終わってしまふ。

ぐるぐると巡る思考。

考えても答えなんてわかるわけがなくて、ただただ膨れ上がる心配。

ひとまずわかることは、エリーゼさんまでありさと同じ事になったら、取り返しがつかないという事だけだ。

ここで止めなければ取り返しがつかなくなる。

俺は咄嗟にエリーゼさんの右手を掴んでいた。

「エリーゼさん、考え直して下さい！」

「どうしてですか？ 楽しそうだし気持ちよさそうじゃないですか♡」

エリーゼさんは恍惚とした表情のまま俺の手を軽く振りほどき、ありさに質問の答えを仰ぐ

ように首を傾げた。

終わった、と思った。

唯一の希望は…

——深緑の瞳の奥は、笑っていないような気がしたことだけ。

ありさはようやく目を合わせてくれた。

そして、「別に構わないけど」とだけ告げると、そのまま王の部屋を去って行ってしまった。

「は♡楽しみです♡」

エリーゼさんは、去ってゆくありさの耳に届く様に、心なしか大きな声で言っているように見えた。

…本当に、エリーゼさんもチャーム魔法にかかっているのだろうか？

「あの、エリーゼさん」

「……………」

エリーゼさんは、自らの口元に右手の人差し指を立てて辺りを見渡した。

それは、盗聴や監視の存在の警戒、それからありさの足音に耳を澄ませているようにも見えた。

一瞬、エリーゼさんの目が鋭くなったような気がしたけど、何事もなかったかのように妖しい笑みを浮かべる。

「あの…あなたとセックスしたいので、宿にでも行きませんか♡」

これは、何かの合図に違いない。

俺はエリーゼさんにアイコンタクトをとるようにしつかりと目を合わせ、頷く。

するとエリーゼさんは嬉しそうに俺の手を握ると、るるんな足取りで扉を引いた。

「嬉しいですよ♡ えっちな事が黙認されている宿が近くにあるので、行きましょ♡」

俺たちは何も言葉を交わすことなく、お城の外まで、そしてその宿まで、ただ歩いた。

宿につくなり、エリーゼさんはようやくといった様子で大きく息を吐いた。そのアクションを見る限り、やはり先ほどの発言は演技だったのだろう。大きく息を吐き終え、表情を整えるエリーゼさん。その顔つきは、俺の見てきたいつもの彼女だった。

「すみません、一部屋お願いします」

宿屋の主に多めに金貨を渡すエリーゼさん。

これは、黙っていてくれよという意思表示だろう。

宿主は不思議そうな顔をしていたが、すぐに察してくれたようで、一番奥の角部屋に通してくれた。

「…また、一番奥の角部屋ですね。皮肉なものです」

「誰かに聞かれても大変だし、こればかりは仕方ないですよ…」

この宿は、決してラブホテルのようなものには見えない。

恐らく、監視されている事を懸念した彼女が、悟られないために発言しただけだろう。

「あの…エリーゼさん。貴女までチャームに掛かっていなくて、本当に良かったです。」

「…心配をかけて、申し訳ありません。あの場ではああするほかありませんでした。」

エリーゼさんは、“キュアノス”の脅威について、ゆつくりと丁寧に教えてくれた。

チャーム魔法の使い手がキュアノスに魔法をかけ、対象にもチャームをかけた時、その女性にはサキュバスのようなドレイン能力が宿る。

対象にキュアノス本体を持たせる事で、ドレインした精気はキュアノスに溜まっていく。また、キュアノスで得たドレイン能力は、遠隔的にドレインする事が可能である。

そして、その“キュアノス”は、

『封印されたはずの、“古の宝石”である。』

「古の宝石……？」

「はい。誰が何のために封印を解いたのかはわかりませんが、キュアノスの遠隔ドレインが原因でラルゴ王国が混乱状態になっているということはわかりました。」

「精気を吸われすぎて、誰も外に出る気力がなくてことですか……？」

「その状態に近いと思います。ありさんの配信は、アーティファクトを通じて放映されています。私もかつて、ニュースなど発信していました。恐らく同じ番組を使用しているのでしょうね。」

今、するべき事。

それは、一刻も早くキュアノスの拡大を防ぐ事、すなわち、直ちにありさのチャームを解除する事か。

「エリーゼさん、もしかして……内部調査のためにあんな提案したんですか？」

「それ以外に何がありますか。私が狂ってしまったと心配して下さるのは嬉しいですが、本気だと思われたなら少し心外です。」

いらぬ心配であつた事に安堵しながら、愚問だった事を謝罪する。

するとエリーゼさんは頬を小さく膨らませると、ムツとしながら目を逸らした。
あの凛々しい表情からは想像もできない可愛らしさを目の当たりにして、俺はエリーゼさんを抱きしめていた。

こんな状況で不謹慎かもしれないとは分かりながら。

「エリーゼさんが変な魔法にかかってなくて、本当に良かった。」

彼女の鼓動が、心なしか少しだけ速くなった気がした。赤面してくれているのだろうか。俺からは見えないけど。

「あなたに心配されると、なんだかくすぐったい気持ちになりますね。」

彼女は、ぎゅ、と俺の背中に腕を回してくれて、軽く俺の服を握る。

その弱い力は、彼女の心境を物語っているかのように感じた。

内部調査とは言うけれど、ありさと一緒に活動するとなるとドレインを促進するのは変わらない気もしてしまう。

ドレインを促進せず、内部の情報を集めるためには……やはりありさに聞き出すしかない。

「…エリーゼさん、ありさに講習を頼むのはどうですか？」

「講習ですか。ありささんとまずは信頼関係を築き、放送をせずになんとか情報収集するとう方針でしょうか？」

「そうです。何も情報がない事には手も打てないですし…」

「あなたって…」

「…はい？」

「…いえ。窮地で活躍するタイプだな、と改めて。」

「ま、まるで俺が普段は頭が悪いみたいじゃないですか…」

「褒めているんですけど。やつぱりあなたは、私の英雄です。」

エリーゼさんは言い終えると、握っていた俺の服への力を緩めたと思ったら、照れくさそうに俺の方へ向いた。

目を合わせ、ふふと微笑みながら俺の唇に自身の唇を重ねる。

次第にそのキスは、まるで恋人同士が好意を確かめあうかのように深くなっていた。

ずいぶんの間、キスをした。

エリーゼさんは、ぷは、と唇を離して息継ぎをする。
そして自らの髪の毛の先をくると指で巻くような動作をしたかと思えば、何かを言いづらそうに目を逸らす。

「…先ほど嘘で言ったことが、本当になってしまいそうです。」
先ほど言ったこと…？

——『あなたとセックスしたいので、宿にでも行きませんか♡』

頭の中にちらつく、エリーゼさんのさっきの発言。

いや、いくらなんでも自意識過剰すぎやしないか。

俺の事を英雄とまで言ってくれているんだ、そんな邪なはずが…
ん？待てよ、本当にこれは邪か…？

「俺も、また…エリーゼさんとセックスしたいです。」
「っ…。直接的すぎますよ。嬉しいですけど…。」

エリーゼさんは何か他にも言いたげな様子だったが、残念そうに首を横に振る。

「ですが、この宿に来たことの本当の目的は、監視の目を潜り抜けて作戦を練るためです。あなたと宿に来ると、つい安心してしまいますね…。逃げ込めた、みたいな気持ちになります。」

「しばらく一緒に続けましたしね、命がけで帰る旅…。」

フラれたわけじゃないけど、なんだか寂しい。

でも、またこうしてエリーゼさんと宿に来ることが出来たのを喜んでいるような自分もいる気がした。

「エリーゼさん、いったん、情報を整理しましょう」

「そうですね、わかっている事、それから憶測であることをまとめてからこの後の行動を考えましょうか」

分かっていることは、何者かがキュアノスでありさにチャームをかけた事。

キュアノスでサキュバスのような力を得た女性は、遠隔でもドレインが可能である事。そして、キュアノスにその精気が溜まっていくという事。

「もしかして、誰かがキュアノスを育てるようになりさに洗脳しているって事…ですかね」

「ドレインしたからキュアノスが育っていく」のではなく、「キュアノスを育てたいからドレインさせる」というように仕向けたという事ですか？」

「はい。動機とか、俺はそういうのはわからないんですけど…。」

「なるほど…。キュアノスは非常に恐ろしい宝石であるという事は、世界でも共通認識です。キュアノスを育てる動機があるとするならば…。終焉を望んでいる…ということになるでしょうか…。」

終焉、か。

ラルゴ王国だけではなく、世界規模で恨みを持っている人間の仕業ということか？

俺はふと、フレデリカの言っていたお城の「侵略」という言葉が頭に浮かんだ。

「お城を侵略した人っていうのが誰なのか分かれれば、何か分かるかもしれないですよね」

「フレデリカの話から、侵略者は、呪術とチャームを同時に使用できる人物、ないしはその団

体……ということになりますね」

「あの……エリーゼさん、今から変な事を言うかもしれないんですけど……」

俺は、フレデリカのかけられたと言っていた「呪い」の違和感について、感じたことを素直に伝えることにした。

「手足の呪いって、断片的にかかるものなんですか？」

「……どういう意味ですか？」

呪術というものがどんな魔法なのかはわからない。

しかし、以前オトハからデバフ魔法をかけられたときに感じたこと、それは、断片的ではなく全身に感じたという事だった。

呪術とデバフがどう違うか、という事も実際あまりわからないのに、こんなことを言うべきではないのかもしれないけど。

「……フレデリカが嘘をついている、と言いたいのですか？」

「す、すみません……。だから、変なことを言うかもしれないって言ったんです。」

「∴。少しだけ、昔話をしてもいいですか？フレデリカのお話です。」

「はい。聞かせて下さい。」

エリーゼさんは、俺のフレデリカへの不信感を拭おうとしてくれたのか、ゆっくりとその情景を語り始めた。

「それは、今から十四年も前の話です。」

――。

「はあ、はあ、はあ、」

献花岬とラルゴ王国の国境から、ラルゴ王国側へ入国してきたのは、青髪の少女だった。

少女が身に纏った服はボロボロで、ラルゴ王国のお城の付近ではこのような身なりの子はいないため、ひと際目立っている。

少女の抜けてきた国境の管理は、ラルゴ守護騎士団の者が担当しており、少女を通したのはラルゴ守護騎士団の団長であるエーレンフェストだ。

「団長！どうしてあの子をラルゴ王国へ入国させたのですか！？」

「時が来るなら、献花岬に戻す。」

「何をおっしゃってるんですか！早くつかまえないと！」

「大丈夫。お前にもわかるときがくるさ。」

本来ならば、私情で入国を許可してはならない。

偶然にもエーレンフェスト団長から入国を許可された少女は、ただひたすら走り続けた。

「はあ、はあ、はあ、広すぎる……。一体どこにあるの……。？」

青髪の少女は、右手に握りしめた濃紺の美しい宝石を切なそうに見つめた。

その宝石は、本来ならば少女が持っているはずもないような、非常に高価そうな代物だ。

貨幣に替えれば、服も食料も数か月分は満足に買えるくらいには…。

早々に迷子になった少女は走り続けたが、後ろをついてきていたエーレンフェスト団長にすんなりと前を塞がれた。

「やあ、先程ぶりだね。どうしたんだい？どこに行きたいんだ？」

「…教えられない。」

「そこをなんとか教えてくれないか。道案内をしてあげるから。」

「……。」

「そうだなあ、宝石屋さんにでも行きたいのかい？」

「……。」

エーレンフェスト団長は優しく少女に問いかけるが、少女は一向に口を開くことはない。

その様子を見て、団長は核心に触れることにしたようだ。

「君が何も教えてくれないなら、僕が君を通した理由を先に教えてあげよう。」

「……。」

「その宝石を扱える君を、ラルゴ守護騎士団に入団させたい。」

「え……。」

「聖域の洞窟から、盗んで……いや、拾ってきたんだらう？ 残念ながら、ラルゴ王国でもその

宝石は売りさばくことはできないよ。」

「な……なんで！嘘つかないでよ！高そうなものは全部ラルゴ王国まで行けば売れる、って……

！」

「誰から聞いたんだい？」

「誰、って……噂で……。」

「そうか。それならば、君は騙されているね。」

「……。」

「安心してくれ。僕は君を騙さない。ラルゴ守護騎士団に入団すれば、衣食住は保証される。」

「……本当に？」

「ああ。ただ、国のために頑張る必要があるけどね。」

こうして、エーレンフェスト団長は少女を宥めた。

少女は次第に、閉ざしていた心を少しずつ開いていった。

献花岬の貧民街で育ったこと、父はおらず、母は病気で亡くなったこと、食べるものがなくて困っていること、そして頼れる人は誰一人いないということ。

少女はエーレンフェスト団長に話しながら、ぼろぼろと大粒の涙を流していた。

「大丈夫。そうだ、君より四歳ほど年下のお姫様がお城にいるんだ。会ってみるかい？」

少女は、こくつと頷いて、エーレンフェスト団長の後ろをついていった。

お城につくと、エーレンフェスト団長は少女に食事を与えた。

騎士用に配給された質素なものだったが、少女にとっては御馳走だ。

食事を終えると簡単にシャワーを浴びせ、子供用の洋服を着せた。

「エリーゼ姫は会いたいと言ってくれているようだ。さ、行こうか」

少女は、姫といわれてもピンと来ていない様子で全く緊張していないようだ。

階段を上り、エリーゼ姫がいる部屋にたどり着く。

扉をノックして、「どうぞ」と中からの声を確認すると、エーレンフェスト団長は敬礼するようにぺこりと頭を下げて入室した。

「エリーゼ様、今日から騎士の見習いとして入団した子を紹介します。」

「まあ！初めまして。お名前は？」

「…フレデリカ。」

「フレデリカ！かわいい名前！私はエリーゼ、よろしくね。」

華やかなドレスを身に纏い、いかにもお姫様として相応しい身なりのエリーゼ姫。

どうやらティータイムだったようで、エリーゼ姫は、デザインの綺麗なグラスコンボートの上に並べられたマカロンをふたつ手に取ると、その片方をフレデリカに笑顔で渡した。

「フレデリカは青い髪が綺麗だから、ミントのマカロンをあげるわね！私は目の色が緑色だから、ピスタチオのマカロン！」

幸せそうに言い終えると、もぐもぐとマカロンを口にした。

美味しそうに「んー」と可愛く唸ると、少女にも食べることを促すように首を傾げた。

「あ……いただきます」

もぐもぐ、と口にする。

こんなに甘くて繊細で上品な味のするものが、この世の中に存在する事すら知らなかった少女は、驚くことしかできなかった。

「そんなに美味しい？よかったー！ ……あ、ちょっと待って！」

エリーゼ姫は、何かに気づいたように包帯を手取る。

「……？」

「フレデリカ、足にあざが出来ちゃってる……。痛そうだから、包帯巻いてあげるね」

――。

俺はエリーゼさんの話を聞き終え、疑ったことを後悔した。

「フレデリカは、幼い頃からまじないの彫られた宝石を触ることができたようで、ラルゴ守護騎士団に十歳の若さで入団しました。エーレンフェスト団長が任期を終えてからは、フレデリカが団長を務めるほどに、彼女は皆から信頼されています。」

「疑ったりして…すみません。」

「謝らないで下さい。怒っているわけではないんです。確かに、あの量の包帯を巻かざるを得ない程の重症ならば、断片的に…というのは考え難いかもしれませんが。ですが、フレデリカが何か悪事を働こうとしているわけではないのだということは、私から擁護させて頂きたいです。」

「…本当、ただ推理しかできなくて申し訳ないです。」

「いいえ。盲点でしたし、他にも気づいたことがあれば教えてください。」

俺は、エリーゼさんに言われた通り、違和感を感じた事を他にも話すことにした。

何故フレデリカは、エリーゼさんが質問した際に自身の怪我について言及しなかったのか。

他にも騎士はいたであろうはずなのに、何故、“私たちの力”でなく“私の力”が及ばなかった、と言ったのか。

何故、頑なにありさの今の状況の事を話さなかったのか。

俺は、どつさりと感じていた違和感をそのままエリーゼさんに伝える。

エリーゼさんは俺の話にうんうんと頷いて、唸りながら思考を整理していた。

「嘘をつかなければいかなかった理由が、絶対にあるはずです。フレデリカは軽率に嘘をつくような人ではありませんから。」

「エリーゼさん、ひとまずありさがこの違和感についても何か知っているかもしれないので、内部調査の作戦を立てましょう」

今はその違和感の正体を考えても埒が明かないと判断した俺は、ありさの持っている情報に託すことにした。

しかし講習をしてもらうとは言っても、どのようにしてアクションを起こすべきか。

ありさに全て話したとて、洗脳やチャームがどこまでの効力があるのかも不明なのだから、逆に危険な気もする。

そう考えると、エリーゼさんがありさの活動に興味を持ったふりをしたことは、ある意味最

適解だったのかもしれない。

エリーゼさんを危険に晒してしまう事には変わりはないが、どちらにせよ何かと懸念するには時は既に遅いかもしれないのだから――。

俺たちは、考え続けた。

ありさへのアクションは、エリーゼさんが引き続き発情したような態度で講習の話を持ち掛けることになった。

ストレートに、シンプルな方が設定忘れや矛盾が起きづらいということ。

それから、情景がはつきりと分らない以上、変なことを言つて断られても元も子もなくなるということが理由だ。

そして、状況に応じてもう一度作戦を練る必要がある場合は、この宿を会議場所にするという事。

あとは、臨機応変に――。

慎重に話し合っていたら、すっかり外は暗くなっていた。

まだそんなに晩くないはずなのに、瞼がやけに重い事に気が付いた。

おかしいな、眠くなっている場合じゃないというのに。

そうだ。そういえば、国境をくぐった前夜も、一睡もしていないじゃないか。

俺の大きな欠伸につられて、エリーゼさんも眠たそうに瞼をこする。

「そういえば、一睡もしていませんでしたね…。まだ少し早いですが、休みましょう」

俺はエリーゼさんの提案に頷くと、丁寧に二つ用意された布団に目をやる。

何故だか、少し寂しいような気がした。

その様子を察してくれたのか、エリーゼさんは奥側の布団に入って、少し詰め気味に横になる。そして、俺の方を見て微笑んだんだ。

俺は、ぺこっと会釈をして、二つ用意された布団に構わずエリーゼさんと同じ布団に入る。エリーゼさんと一緒に布団で寝ることも、すっかり慣れてしまったものだ。

「もうエリーゼさんと一緒に眠れる日はこないと思ってたので、嬉しいですね。こんな事態で、何言ってるんだって感じかもしれないけど…」

「嬉しいような、悲しいような…不思議な気持ちですね。」

お互いのぬくもりを感じていたら、俺たちはいつの間にか眠りについていた。

第四章 真実を知るための甘い罠

窓から射す木漏れ日。

今日も、皮肉なほど爽やかな小鳥の声で朝が運ばれてきたことを感じる。

就寝が早かった割には、しつかりと寝すぎてしまったようだ。

すぐ隣で、すうすうと静かに寝息を立てているエリーゼさんを起こさないように気を付けながら、静かに布団を出ようとした。

すると、布団の小さな揺れに気づいたのか、エリーゼさんは俺の服の袖を軽く掴んで、引き留めるように小さく引つ張った。

「待つて……ください。」

「エリーゼさん？」

「ぎゅって……抱きしめて下さい。」

可愛い……と、思ったことに罪悪感を感じた。

振り返ってエリーゼさんの様子を確認すると、静かに涙を流していたからだ。

俺は、急いでエリーゼさんを抱きしめる。

彼女の感じている責任や不安は、俺には計り知れないのだと思いがち。

「……ごめんなさい。わがままを言っちゃってしまつて。」

「いや、俺は貴女の心の傷を癒すつて約束しましたから。良いんですよ。」

——癒せてるかどうかは、わからないけど…。

——少しでも、貴女の心の支えになれているなら、本望です。

俺は、エリーゼさんの背中をトントンとしながらさすつた。

彼女が以前俺にくれた時のように、優しく、愛情をこめて。

しばらくするとエリーゼさんは落ち着いてくれたようで、いつもの凛とした顔つきに戻つていた。

その様子を見て、改めて彼女の「姫」という宿命の重さを感じ取った気がした。

「ありがとうございます。もう大丈夫です。さあ、もう一度お城に戻りましょう。」

俺たちは身支度を終え、宿主にぺこりと会釈をして宿を後にした。

――。

お城に到着すると、施錠されていないでくれ、と願いながら俺はまた城の入り口の大きな扉に手を伸ばした。

その願い通り、大きな入り口のその扉は軋む音を立てながら俺たちの通行を許してくれる。俺たちはアイコンタクトをとると、昨日と同じように急いで王の部屋に向かうことにした。

不安と懸念と、焦燥感。本当に色々な感情が交錯する。

俺たちの足は、その心境を表しているかのように、自然と階段をハイペースで駆け上がっていた。

はあ、はあ、と肩で息をしながら、重厚感ある扉の前までたどり着くと、俺はその扉に手を

かける。

今度こそ、ためらわずに取っ手を押し込むことが出来た。

ギギギ、と重たく音を鳴らす扉の先の大きな機械の前には、誰の姿もない。

そしてそれは動作しておらず、現在は配信されていないようだった。

「ありがたない……。」

俺が辺りを見渡しながらボソツと呟くと、後ろから知らない人物の声が聞こえた。

「あら。エリーゼ様と……そのお客様かしら？」

その人物はオレンジ色の綺麗な髪をゆるくまとめしており、赤と黒を基調とした華やかな服装を身にまとった大人の女性だった。

その高貴さは、どこかの貴族かとさえ思ってしまうほどだ。

エリーゼさんはその女性の姿を見て、表情をガラツと変えた。

「まあ、カオスプロダクションの社長様じゃないですか♡ お名前は…確か、セレナさんでしたよね♡ 今日、ありがたさんのアダルトビデオでも撮影にいらしたんでしょうか？」

セレナ、と呼ばれた女性はエリーゼさんの様子に驚いたように目を丸くすると、妖しい笑みを浮かべながらエリーゼさんに近づいた。

「あら、数回しかお会いしたことがないのに、よく覚えていて下さいましたね。……エリーゼ様、もしかして……貴女もアダルトビデオの出演に、ご興味があります？」

…いくらなんでも邪すぎる。

アダルトビデオはカネが儲かる、なんて誰しもが安易にイメージすることができが、その想像は間違っていないのだとこの時俺は悟った。

本物のお姫様がアダルトビデオに流れ着いたとしたら、一生何もしないでも生きていけるくらい利益を得ることができのだろう、と想像も容易い。

エリーゼさんも、同じことを思っているに違いないけど…。

彼女のことで、内部調査と言いつつも聞かせながら領いてしまうだろう。

その嫌な予想も裏切られることはなく、エリーゼさんはにこやかな笑顔を創ってセレナに媚びを売るように頷いた。

「はい♡ありささんばっかりずるいです。私も、アダルトビデオ……撮ってもらえないでしょうか？」

深緑の瞳の奥は笑っていない。

俺はエリーゼさんの覚悟に沿うように、フォローをすることにした。

「セレナさん。エリーゼさんとありさが同じ画に映るの、視聴者として楽しみです。」

「エリーゼ様がそう言ってくださるなら、是非うちで撮らせて頂きたいわ♪ あ、それから、あなたはどちら様で？」

エリーゼさんにしか興味がないのは当たり前だけど、すごく失礼な人だ。挨拶をしなかった俺も大概だけど。

「挨拶が遅れてすみません。俺は……ありさの幼馴染で、」

「幼馴染！なんで早く言ってくださらなかったの？だったら竿役では非撮らせて欲しいわ♪」

……興味ないよな。そうだよな。

まあでもこれで、ありさやエリーゼさんに何かされようものなら、すぐに守ることができる。うだ。守ると言っても、魔法が使えるとか剣が扱えるとか、そういった物理的な方法なわけじゃないけど……。

俺も一緒なら、きっとエリーゼさんの不安を少しでも打ち消すことができるはず。

しかし、疑われてはならない。

慣れないけど、俺もテンションを合わせることにした。

「竿役っすか！そんな美味しい思いをさせてもらえるなんて嬉しいです！」

「ふふ♪あなた、わかってるわね♪気に入ったわ。このあと、早速ありさちゃんのご二作目のアダルトビデオの撮影が決まっているのよ。よかったら、あなた達との絡みをメインに撮らせてちょうだい♪」

「もちろんっすよ！ね、エリーゼさん！」

「はい♡アダルトビデオレーベルを数多くお持ちのカオスプロダクションに撮影頂けるなんて、光栄に思います♡」

こうして、エリーゼさんと俺はありさのアダルトビデオに出演することになったんだ。

――。

撮影一時間前。

王の部屋に訪れたのは、エリーゼさんの正装を身に纏ったありさだった。

撮影前の最終打ち合わせで、大幅に撮影のスケジュールと出演者が変更になった事がありさに告げられる。

「え！？聞いてないんですけど」

セレナさんは申し訳なさそうに、ありさに修正版の台本を渡した。

「ありさちゃん、ごめんね。今日は、姫様の分身っていうシチュエーションで撮らせてもらいたい」

「ありささん、よろしくお願いいたします♡」

「別にエリーゼの分身っていうのは構わないけど、どうしてこいつも一緒なんですか？」
嫌なものを見るような目で俺を見るな。

あまりにもショックで、思わず口を出しかけた。

機嫌を損ねまいと言葉を選んでいるセレナさんに構わず、ありさは言葉が続ける。

「私のポリシーとして、画面に男の人を映したくないんだけど…。」

どうやら先ほどの言葉に他意はなかったようで、俺は胸を撫でおろした。嫌われたのかと思っただけじゃないか。

「あ、それなら大丈夫よ♪言ったでしょ？竿役だ、って♪最新技術の主観型の撮影をしようと思っっているから、その身体役ってこと♪」

最新技術の主観型撮影…？

それって、巷ではよく「男がディスク鑑賞をできる」と謳っているお店で取り扱っているらしい、あのVRのアダルトビデオだろうか？

実際には見たことがなかった俺は、なんとなく噂で聞いていた内容をイメージしながら、受け取った台本をばらばらとめくる。

するとその台本には、俺の想像を遥かに超えていく指示が書き連ねられていた。

キュアノスが埋め込まれたシリコン製のリングを俺の陰茎の根本に装着し、画面越しの視聴者と感覚を同期させること。

竿役は、可能な限り射精を繰り返すこと。

そして主観型アーティファクトは、竿役が目元にゴーグルのような形のものを装着し、疑似的に撮影をすること。

目を丸くしている俺の様子を奇怪な目で見たあたりは、頬を小さく膨らませながら台本に目を落とした。エリーゼさんもそれに続く。

「あ、あのー……。これって、俺にも魔法をかけるんですね？」

「魔法？ああ、キュアノスの装着の下りかしら？ 特に必要はないわよ♪ありさちゃんの日頃の配信のおかげで、視聴者さんたちは既にキュアノスと同期できている状態だから♪」

つまり、この映像が世に出なければ、ありさの持つ大きなキュアノスが育っていくことはないということか？

ここまで確かな情報がぼんぽんと出てくるあたり、ありさにチャームをかけたのはセレナさんで濃厚だろう。

キュアノスの封印を解いたのも彼女なのだとしたら、カネのためにどんな犠牲をも厭わない、
“ヤバい人”なのかもしれないな。

しかし、確証がない以上、憶測の域を超えることはできない。
考えてもわからない事だらけだ。

会話や撮影を通じて、何か手掛かりが見つければいいのだが。
俺はひとまず諦めて、引き続き元のテンションを続けることにした。

「うわー……めちゃくちやエロいつすね。主観型かあ〜」

「あんたは沢山射精しないとダメだからね♡」

ありさは挑発するように、ぺろ、と舌なめずりをした。

一通り台本を読み終えた様子で、その内容に満足しているかのようにだった。

その様子を見て、セレナさんはまたひとつ妖しく笑みを浮かべると、両手を勢いよく合わせて、パンっという音を立てた。

「さあ♪準備が出来たら、撮影をさせて頂戴ね♪ひとまずあなたには、映像撮影が可能なゴーグル型アーティファクトと、キュアノスのついたリングを渡すわ。基本的には、台本の内容に沿っていれば自由に動いてもらって構わないからね♪」

「わ、わかりました」

「じゃ、よろしく頼むわね♪エリーゼ様とありさちゃんも、よろしくお願いしますね。」

「はい♡」

「はあーい了解でーす♡」

あとはご自由にと、そう言わんばかりに、セレナさんは王の部屋を去っていった。

勿論ここにはコントロールルームなどはないため、そばで監修することは出来ない。

恐らく彼女の機材とゴーグル型のアーティファクトが繋がっているのだろう。

俺は、一連の流れを頭の中で整理する暇もなく、ただセレナさんに指示された通りに装着物を正しく身に着ける。

キュアノスの埋め込まれたシリコンのリングを陰茎に装着するなり、まるで身体に電気が走ったかのような感覚に陥った。

そして、ぞわぞわつとしたような不思議な感覚もこみ上げてくると同時に、性への虜になつてしまつたかのような気持ちになつてくる。

これが、キュアノスの力なのか――。

キュアノス。直径がとてに小さいのに、こんなにも強い力を持っているのだとしたら、かつて封印されていたと聞いても頷ける。それにしたつて、ありさの持っているキュアノスは、こんな小さなものとは比べ物にならない程サイズが大きい。

ましてや、チャームで洗脳されているのだとしたら、もう正気を保つことが不可能なのではないかと想像も容易い。

もしかすると、今のありさに何かを聞いても無駄なのかもしれない。情報収集は頭打ちか、と俺はこの時に薄々と感じていた――。

ひとまず、台本には、ありさが撮影の先導をしてくれと記載があつたため、俺たちはありさにアクションを委ねることにした。

ありさは、すると丁寧にドレスを脱ぎ始める。

その様子を見て、エリーゼさんも慌てて後に続く様に服を脱いだ。

ありさは服を脱ぎ終えると、人が変わったかのようにうっとりとした顔つきになる。やはりそれは、まるで何かに憑りつかれているかのようだ。

「はーい♡ナイトのみんな、こんばんは♡あなたの可愛いお姫様、エリーゼです♡この度は、私、エリーゼのエッチなビデオをご購入下さり、本当にありがとう♡今日は、特別ゲストを呼んでいるよー♡さ、どうぞー♪」

「あ：♡ナイトの皆様、こんばんは：♡エリーゼ・ル・ローレッタと申します♡私は、こちらのエリーゼ様の分身です：♡」

「ふふ、よろしくね、エリーゼ♪」

「はい、どうぞよろしく願います、エリーゼ様♡」

二人のやり取りを聞きながら、音を立ててはならないと息を殺す。

ゴードルのレンズ越しに見える二人の姿はとても官能的で美しく、まるでありさが二人、エリーゼさんが二人いるように見えてとても不思議な光景だった。

「今日はね、前回のエッチなビデオの時とは違って、ナイトのあなたの身体をこっちに具現化したみたいな撮影してもらえるんだってー♡」

「すごいですね♡ほら、見て下さい。このおちん×ん、もうこんなに大きくなってますよ、エリーゼ様♡」

「ほんとだ♡いっぱい期待してくれてるんだねー嬉しい♡」

俺は、情報収集の目的でこの場に居る事を忘れてしまうくらい、この不思議な光景に見入ってしまっていた。

二人に今からされる事を想像したら、背徳感で背筋のゾクゾクが収まらない。

「まずは、いつものー、おちん×んを舌でれろーってしてあげようかなー♡エリーゼも一緒にね？」

「はい♡」

「じゃあ、いくよ？セーのっ♡」

「セーの♡」

左右の二人から同時にゆっくりと陰茎を舐め上げられ、思わず声が漏れそうになった。その様子に気づいたのか、追い打ちをかけるようにありさはゆっくりと舐め上げることを続

ける。

「声だしちゃあ、ダメだからね♡がまんがまん♡」

にひひ、と笑い、卑猥な音を立てながら陰茎を舐めるありさの姿は、想像を絶する程に官能的だった。それだけでも思わず射精欲がこみ上げるくらいだ。ありさに倣い、丁寧な陰茎を舐め上げるエリーゼさんの姿もまた、別の形で官能的で愛おしい。

こんな状況で、狂わないでいられるはずがない。気持ちいいを通り越して、気を失いそうだ。そんな俺を気にもせずに、彼女たちの行為はエスカレートしていく。

「声を我慢できて、偉いですね♡」

「偉いあなたには、もーつと気持ちいいご褒美あげないとねー♡」

「それじゃあ、私はお耳を沢山気持ちよくしてあげます♡」

「私はあ、お耳とー、おちん×ん♡」

「ふふ、エリーゼ様ったら、欲張りなんですから♡」

彼女たちの吐息が耳にかかったと思ったら、すぐに舌のぬるりとした感触に襲われた。彼女たちの、うねるように蠢く舌の動きは、耳で受けるにはもったいない程気持ちがいい。

息継ぎでかかる吐息が、背筋をゾクゾクとさせてくる。

下手に身体をくねらせてしまえば、この官能的で美しい光景をそのままレンズに映すことが

できなくなってしまう。

この映像は世には渡ってはいけないというのに、美しく撮りたいと思ってしまうのは一体何なのだろうか。

考える余裕なんて今の俺にはないのだから、ただ本能に従うことしかできなかった。

次第に陰茎に伸びる、綺麗な手。

その手は、びくんと跳ねるそれを優しく捉えようと、先ほどの二人の唾液と先走り汁を上手に使い、しなやかな手首の動きで刺激を与えてくる。

それは、くちゅ、くちゅ、と淫猥な音を発し、俺の興奮を煽った。竿役が言葉を発してはいけないという決まりが、こんなにもどかしいものだとは思わなかった。

「おちん×んをしこしこされながらお耳も気持ちよくされちゃうなんて、最高の気分なんじゃないですか？♡」

「あなただけ。あなたにしか、しないよ？こんなこと♡」

「ねえ？」

「どっちのエリーゼと、セックスしたい？♡」

選べるわけない。

「私は、丁寧でねつとりとしたセックスが得意です♡」

「私はあー、ぢゅっぽり激しいセックスが得意♡」

「ね？」

「どちらにしますか？♡」

台本にはこんな事は書いていなかったじゃないか。

俺は、選べないと首を横に振った。

「にひひ、選べないと思った♡」

「こういうのは、早い者勝ち…というものですよね？」

うつとりとした表情で、エリーゼさんは俺に馬乗りになった。エリーゼさんの陰唇の割れ目にぐちよりと押し付けられた俺の陰茎は、興奮のせいかびくびくと跳ねて止まない。

その様子を見て、ありさは頬を膨らませると、やれやれと言わんばかりに首を横に振った。

「先越されちゃったんだけど…。もどかしいけど、折角だから私はキスしてあげようかな♡」

素股状態で淫猥な音を立てる陰部の快感だけでなく、唇にも柔らかくてねっとりとした感覚が追加され、今度こそ頭は真っ白になりそうだ。しかし今射精したら画的にはよくない。そんな謎の使命のようなものが、射精に歯止めをかける。

「そろそろ…ナカに、挿れちゃいますね…？♡」

陰唇の割れ目と陰茎がこすられるくちゅくちゅという音は、エリーゼさんのその発言により、

更に深い音に変化した。

ぬぷと温かくて狭い膣に包まれた陰茎は、エリーゼさんの腰のグラインドに合わせて、ぐちょ、ぐちょという淫猥な音を立てる。

腰の動きに合わせて、その淫猥な音が大きくなつていくのは、甘くて蠱惑的な嬌声で俺の陰茎に媚びるエリーゼさんのせいだ。

その様子を見て、ありさは更に激しいキスをねだるように俺に覆いかぶさった。

エリーゼさんの甘い嬌声、視界いっぱいのあるさの可愛い顔、ほのかに香る甘い香水の匂い、淫猥な音、陰茎を包む膣の温かさ、そして息をするのも忘れるほどの激しいキス。

五感のすべてが彼女たちでいっぱい、俺はいよいよ耐え切れなくなり、エリーゼさんの膣の奥で思い切り果ててしまった。

しかし彼女たちは構うことなく行為を続ける。

「あ：♡思い切り奥で出せましたね♡えらいえらい♡」

「射精しちゃったんだ？♡じゃあ次は私の番だね？」

「そうですね、そろそろ交代しましょうか♡」

にゅぷん、と陰茎が引き抜かれたと同時に、エリーゼさんの陰部からトロトロと白濁液が零れ落ちる。この時、しっかりと中出しをしてしまったのだと改めて実感し、勃起が収まらない。

それどころか、その官能的な光景にゾクツとしてしまう。

「精子こぼれてるよ、エリーゼ♡エロすぎ♡」

「本当ですね…♡あ、それなら、この精子をおちん×んに塗りたいかって…ふふ♡この状態でエリーゼ様も挿れてみてはどうですか？♡」

「本物の精子ローションだ♡うわエロ…♡」

二人のやり取りに目が離せない。すっかり二人にのめり込んだ俺は、身体を委ねることに最高の快感を感じていた。もうどうにでもなれ。もつと気持ちよくしてくれ。

「じゃ、頂くね♡」

にひひ、と妖しい笑みを浮かべ、ありさの膺はにゅぷと俺の陰茎を飲み込んでいった。

「すごいですよ…♡ほら、エリーゼ様のおま×こに、飲み込まれていきます…♡」

その様子を恍惚とした表情で見ていたエリーゼさんは、耳元でその光景を実況し始めた。

どうする。本当にどうする。このままでは、ありさにも中出ししてしまう。

せめて外に出さないうちと思ったときには、もう遅かった。

容赦なく、ぱちゅん、ぱちゅん、と音を立てながら激しく上下にピストンするように腰を落とすありさは、獣のような淫猥な嬌声をあげながら、ただ快感を求めるように俺を離さない。

「ほら、遠慮なくて良いんですよ♡中出し、しちゃって良いんですよ」

エリーゼさんは拍車をかけるように、耳元で俺の射精を促す。射精したばかりなのにも関わらず、俺はありさの膣に思い切り射精した。

「んあゝゝゝ♡んおッ♡やば、いっぱい出てる♡」

ありさは、身体をびくんびくんと震わせ、まるで射精を歓迎するように膣をきゅつと締めてくれた。

「すごいですね…♡いっぱい出せましたね♡」

「まだ足りない…もつと、もつとお♡」

ぐつたりとした俺に構うことなく、ありさはピストンを再開した。膣の中に出したばかりの精液が潤滑油になり、とてつもなく卑猥な音を立てている。

心なしか、何かを吸い取られるような感覚もあるが、そんな事を気にしている暇もなく、ばちゅんッばちゅんッという音を立てながらピストンされ続けた。

いつの間にか、俺はあまりの快感に気を失ってしまった――。



…。

「…さい。起きて下さい。」

「あ、目が覚めた？…大丈夫？」

——あれ…？さつきまで、アダルトビデオの撮影をしていたよな…。

「撮影は無事に終わりましたよ。体調はどうですか？」

「ごめんね、気持ちよすぎたよね。もう終わってるから喋っても平気だよ」
「どうやら、撮影は無事にクランクアップしたようだ。」

まだぼんやりとする頭では、言葉通りの事を理解するしかできなかった。

「終わったのか…途中から記憶がなくて…。」

「お疲れ様♪とてもいい映像が取れていたわ♪あなたが気絶しちゃったタイミングで上手いことフェードアウトするように編集するから、大丈夫よ♪」

ぼん、と俺の肩に手をのせ、妖しく微笑むセレナさんを見てすべて思い出した。そうだ。俺とエリーゼさんは、内部調査のためにこのアダルトビデオの撮影に臨んだんだ。

途中からすっかり目的がすり替わってしまったことに、酷く自責の念に駆られる。

「ところで♪エリーゼ様、あなたもキュアノスを育ててみませんか？♪」

ピリ、と空気が凍ったような気がした。

セレナさんのその発言が核心に触れた気がした俺は、エリーゼさんのほうを向いてアイコンタクトを取る。エリーゼさんは小さく俺に頷くと、騙されているフリを続けた。

「とても興味があります♡もしかして、セレナさんがキュアノスの封印を解かれたのですか？」

「私が封印を解いたわけではないわ。棚から牡丹餅つてところかしらね♪興味があるなら、ありさちゃんのキュアノスを半分に砕いて分けないといけないわね♪」

セレナさんがありさの胸元のキュアノスに触れようとしたときだった。

王の部屋までの階段を駆け上がる足音が、一同の耳に障る。

その足音は、尋常ではない速さでこちらに近づいてきていた。

「ダークレイン！」

「ぎゃ……！！」

重たい扉がボタンという音と共に力強く開き、どこかで聞いた“あの声”が聞こえたと思っ

たときには、既に遅かった。

セレナさんめがけて闇の雨が降り注ぎ、彼女は思い切り被弾してしまったようだ。

「オトハ……！何をするのですか……！」

「ごめんなさいね♡今日の目当ては、エリーゼ姫ちゃんじゃないのよ」

「……な！どういことですか？」

「セレナ・ワルフローレ。この女の暗殺依頼が入ったのよね。それも、匿名で。相当積みれちゃった断れないのよ。だから、お命……頂くわね♡」

「待ちなさいオトハ……！」

エリーゼさんの忠告に構うことなく、オトハは自らのデバフで動きを封じているセレナさんの心臓付近をめがけて、苦無を投げた。

「レイジングリベレート……！」

しかしその苦無は、エリーゼさんの光の盾によりあっけなく床に落ちる。

「オトハ！待ちなさいと言いました。聞こえませんでしたか？」

「エリーゼ姫ちゃん、貴女が一番、よく分かてるんじゃないの？危険な宝石でイケナイ事してる悪い社長がいるってこと！」

「…オトハ、何故それを知っているのですか？」

「タレコミと暗殺依頼があつたからに決まつてゐるじゃない。このまま暗殺が成功すれば私も貴女もWin-Winつてところでしょ？だから邪魔しないで欲しいんだけど」

イラついた様子で苦無を拾い上げ、オトハはもう一度構える。今度は容赦しない、と彼女の瞳が物語っていた。

しかしその様子に怯むことなく、エリーゼさんはスタン状態のセレナさんの前に立つ。

「オトハ！セレナさんを暗殺したら、真相は迷宮入りしてしまいます。今は、まだ待っていたきたい」

攻防が繰り広げられる中、俺は困っている様子のありさの元に駆け寄った。そして、セレナさんから離れるように距離を取る。

「あら、その言いようだと、暗殺自体には賛成ってことなのね？」

オトハが構えた苦無を納めたときだった。びりびり、という電撃のような音と共にガラスのようなものが割れる大きな音が俺たちの耳に飛び込む。

その電撃は、スタン状態から解放されたセレナさんが発したものだつたようだ。

「ごめんねー、殺されるよりはみさだから。ばいばい♪」

そう言い残し、セレナさんは割れたショーウィンドウの中に丁寧に飾られたローレッタに触

れたのだった――。

ローレッタは、すさまじい光を放つ。

光が収まり、目を開けた時にはセレナさんの姿はどこにもなかった……。

「……なんてことを」

落胆したように、エリーゼさんは膝から崩れ落ちた。

今までの情報収集も、作戦も、すべて無駄に終わってしまったような気がした。かける言葉が見つからない。

「真相っていうのが何のことか私にはわからないけど、セレナを放っておけば和国にも悪影響なのよ。ごめんなさいね。」

オトハは真剣な表情で俺たちにそう告げると、目を伏せて話を続けた。

「…特別に教えてあげる。チャームなら、かけた人間以外でも解く方法はあるから。頑張ってみつける事ね。」

そう言い残し、オトハは素早く去っていった。

一度は攫ったエリーゼさんのことを見逃し、情報まで教えてくれるなんて、オトハは本当は

悪い人ではないのかと錯覚してしまう。

「エリーゼさん…すみません。」

「どうして謝るのですか…?」

「いや…俺が、セレナさんの動きを読めたら、止められたかもしれないから…」

「…言っても仕方ありません。あのような行動をセレナさんがとることは、誰にも予想できませんから…気にしないで下さい。」

深緑の瞳はうるうると滲んでいる。エリーゼさんが臉をゆつくりと閉じた瞬間、大粒の涙が彼女の頬を伝った。

涙が零れ落ちた時、エリーゼさんは我に返った様子で首を横に振る。このままではいけない、そう奮い立てているようにも見えた。

その姿を見て、俺は、彼女一人に全てを背負わせてはいけないと強く思った。

俺は隣にいるありさの頭に軽く手をぼんと乗せてから、エリーゼさんに近づく。目に沢山の涙を溜めた彼女の瞳は俺を捉えると、また偽りの笑顔を浮かべた。

「ごめんなさい、私としたことが泣いてしまうだなんて…きや」

俺はそつと、エリーゼさんを抱きしめた。

もう、嘘をつかないでください。

「辛いときは、辛いと言っている。誰かに頼っている。頼れる人がいないなら、俺を頼ってくれたらいい。だから、もう：無理に笑わなくて良いんです。」

彼女は、声を上げて泣きじゃくった。

ラルゴ王国の国民のために、そしてありさのために、様々な思いと葛藤と心配があつたのだと思う。想像する事しか出来ないが、その責任感と使命感に押しつぶされてしまいそうになるのは当たり前だ。

俺は、彼女が落ち着くまで、ただ優しく背中をさすってあげた――。

第五章 終わらないバトン

「ありがとう、もう…大丈夫です。」

エリーゼさんは落ち着いた様子で俺から離れると、小さくお辞儀をした。慌てて俺は首を横に振る。こんな事くらいしかできないけど、少しでも彼女が落ち着いてくれたならよかった。

気を緩めて、エリーゼさんと離れた瞬間だった。

黒い仮面に黒いローブを纏った何者かが天井から現れ、エリーゼさんの背後に回り込み、彼女を抱える体勢で首元にナイフの切っ先を突き付けたのだ。

「…ッ！！！」

「エリーゼさん！！！」

「フレデリカ…助けて…！」

咄嗟に、エリーゼさんは彼女の騎士の名前を呼ぶ。

その声を聞いた黒いローブを纏った者は、動揺した様子で動きを止めた。一瞬のその隙に俺

はエリーゼさんの腕を引っ張り、黒いローブの者から引きはがす。

「大丈夫ですか!？」

「ごめんなさい、大丈夫です…!」

黒いローブの者は俺たちに向き直ると、今度は鞄から剣を引き抜いて構える。いよいよこちらに切りかかってくるような動きをしたとき、エリーゼさんは想像を絶する事を言っただ。

「…フレデリカ。貴女でしょう?」

「……!」

一瞬、時間が止まったように思えた。

フレデリカ、と呼ばれた黒いローブの者も動きをピタリと止める。

そして、諦めた様子でローブのフードを脱ぐと、顔を大きく覆っていた黒い仮面を取り外す。その人物は、本当に青髪的女騎士、フレデリカだった。

「その美しい剣の構え方、そして俊敏な動き、貴女しかいません。」

「……エリーゼ・ル・ローレッタ。貴女はいつもそうだ。」

「フレデリカ……？」

「そうやって私の心をいつもかき乱す。初めて会った時もそうだった。献花岬から迷い込んできたただの貧乏人に、貴女は嫌な顔一つしなかった。むしろ、歓迎しているかのようで反吐がでるんだ……」

「……。」

「私は幼い頃、キュアノスが封印されている聖域にある、刻印が刻まれたラピスラズリをひそかに窃盗しました。」

「……はい。」

「エーレンフェスト団長も、貴女も。何故私を罰しない？何故、私を騎士に育てた？赦された私はどうすればよかったんですか！？食べるものがなくて常にお腹がすいていて、住む場所もない。窃盗した宝石が高く売れると信じてラルゴ王国に迷い込んだ私が、何故赦されたんですか！？」

フレデリカは涙を流しながら訴え続けた。

「どうして、悪い事をしたのに歓迎されたんですか？どうして、私に優しくしてくれたんです

か？どうして、私が団長になったんですか？」

「フレデリカ、それは……貴女が特別だったからです。」

「……特別？」

「貴女は助けを求めていた。悪い事をしたくしてたのではない。悪い事をしないと、生命の維持にかかわったんですよ？」

「……涼しい部屋でマカロンを食べながら紅茶をすすれる貴女に、何がわかるのですか？」

「飢餓は私にはわかりませんよ。でも、フレデリカ、貴女がとても誠実で素敵な人であることはわかります。」

「貴女は、そうやってまた私の心をかき乱すんだ……。いい加減、私を悪者にしてよ！」

「フレデリカ……。」

「もう、やめよう。フレデリカさん。」

涙でぐしゃぐしゃになったフレデリカを宥めたのは、ありさだった。

ありさは、そっとフレデリカに近づくと、にひひと笑って話を続ける。

「私は、貴女の事が好きだよ。ラルゴ王国に飛ばされてきて困ってる私を、助けてくれた。エリーゼが攫われて、ラルゴ王国のみんなが困っている事を、誰よりも心配してた。そんなフレデリカさんは、かつこいいよ。だから、私は貴女に協力しようと思ったんだ。どんなに危険な

「ことでも、ね。」

フレデリカは、ありさに向き直り愛おしそうに彼女を見つめる。それに応えるように、ありさは微笑んだ。

「…フレデリカ、貴女はもう償いました。刻印の刻まれた宝石だって、あの時エーレンフェスト団長を通して聖域に戻されているのですから。」

「…エリーゼ様。キュアノスの封印を解いたのが私だと知っても、同じことが言えますか？」

「……！ 過ちは……償えば、いいんです。」

「エリーゼ様のそういうところ、大好きです。そして、大嫌いです。」

「フレデリカ。私が命を捧げれば、貴女は満足ですか？」

「……解放してくれば、私はもう何もいりません。」

「解放……？」

「ラルゴ王国への罪悪感と、貴女への恋心から…。」

……。

フレデリカは、エリーゼ姫の暗殺未遂をした、とラルゴ王国の偵騎団に自首したことにより、彼女は王国を追放された。献花岬に帰国し、その後彼女は牢獄に入ったそうだ。事情聴取に来た偵騎団には、混乱を招きかねないためキュアノスについての内容は伏せる事にした。

しばらくして、かつてフレデリカの使っていた部屋に向いた。

フレデリカの部屋は、ベッド、サイドテーブル、そしてクローゼットが非常に綺麗に使われており、余計なものもないとても簡素な部屋だった。唯一ある物と言えば、サイドテーブルの上に飾られた、エリーゼさんとフレデリカが幸せそうに笑う写真と、くるくると丁寧に片づけられた包帯のみだ。

「……。」

エリーゼさんは、大切そうに片づけられている包帯を手にとると、何かを追想するように目を閉じる。しばらくして、俺に向き直ると申し訳なさそうに口を開いた。

「ごめんなさい…。全部、あなたの推理通りでした…。」

「…いや、謝らないで下さい。普通なら、仲間を疑うなんてできるわけないんですから…。」
「もう落ち込んでも仕方ないという事もわかっているのですが…：：：気持ちが減入ってしまいま



す。」

「ねえ、エリーゼ。」

やり取りをじつと傍観していたありさは、ようやく俺たちに向かって言葉を発した。

「フレデリカさんから聞いた話と、私から見たフレデリカさんの話も交えて、伝えてもいい？」

「…はい。」

「知ってると思うんだけど…フレデリカさんね、すごく責任感のある人だった。そして、何よりエリーゼの事が好きだったんだと思う。でもね、エリーゼの優しさに押しつぶされそうだとおもうってんだ。」

「……優しさに？」

「うん。フレデリカさん、私に親切にしてくれて、沢山貴女のことを話してくれた。でもね、私が…素直にならないと潰れちゃうよ、って言ったの。」

「……。」

「そしたら……もう、解放されたいんだ、って話してた。エリーゼが攫われたときに王国を留守にしていたのも、キュアノスの封印を解く旅に出ていたからだ…って。私がこの世界に飛ばされてきた時には、もう既にラルゴ王国を滅ぼして自分も死ぬつもりだった…って言ってた

よ」

「それで…キュアノスの力を使って、ありさんがエリーゼとして国民の精気をドレインすることで、国を滅ぼそうとした、ということでしょうか…。」

「まあ…私はこの世界の事も、ラルゴ王国がどんなところなのかも知らなかったからね…。それなら協力できるよ、って言ったの。そしたら、フレデリカさんは、すぐく申し訳なさそうにセレナさんのところに私を連れて行った。」

「……それで、チャームをかけられたのですね」

「うん。セレナさんは、闇の組織っぽいところとも繋がりがあつたみたいで、多額のお金が必要だったみたいなんだよね…。フレデリカさんの要望と、セレナさんの希望が合致したことで、アダルトビデオやエッチな放送で、国民から精気とお金を吸い取ることになった…。」

「……………」

「私は、最初こそ魔法がかけられて何が起きているのか分からなかった。正気じゃなかったし…。でも、キュアノスに力が溜まるたびにすごく気持ちよかったから、いつの間にか快感になつてたよ。国が、どんな事になつているのかもわからないままね…。」

「…こうなってしまったのも、私の責任です。」

「……………」

長い長い会話を止めることになったのは、エリーゼさんの発言だった。ひどく自責の念に駆られている様子で、その言葉に他意はないように見えた。しかしありさは、エリーゼさんを見て小さくため息をつく。

「…なんとなくわかったかも。優しさは、時に毒にもなり得るんだ、つて…こともかね。」

「ありさ、お前なんでそんな嫌味みたいな事言えるんだよ」

「一般庶民からすれば、エリーゼの良い子すぎる行動や発言は、むかつくこともあるのかもな…つて思ったからだよ。」

「たとえそうだったとしても、フレデリカやセレナさんのしたことは、許されていい事じゃないだろ？正当化するのはやめろよ」

「わかるよ、あんたの言いたい事も。頭ではわかっていても、心が悲鳴を上げることだってあるって言いたいのだ。」

「申し訳ありません。…私に、教えて頂けませんか？どうすれば、変わることができるのか。このままでは、また同じ悲劇を生みかねません…。」

「エリーゼが生粋の良い子なのはわかるからさ…私もいじめたいわけじゃないの。変わるとしたら…そうだな…」

ありさは、うーん、と小さく唸り言葉をまとめようとしている。今のエリーゼさんにはあまり強い言葉をかけてはいけなないと、彼女なりの配慮だろう。

「赦しすぎないこと、かな。それから、すぐに自分を犠牲にしない。」

「……ありがとうございます。きつと、フレデリカやありささん以外にも、同じことを思った人はいたはずです。しかし、私が王族という立場であるからこそ、言えるはずがありませんよね。ありささんからの言葉は、私にとつてとても貴重です……。」

「うん……。」

「……ところで、フレデリカのかけられた呪いについて、ありさは何か知ってるか……？ 沢山包帯を巻いてただけ……。」

「呪い？ ああ……知ってるけど、言わないでおく……。」

「……わかったような、気がします。」

エリーゼさんは、悲しそうに俯いた。ありさの発言を聞いて、あの「呪いの魔法」とやらが嘘だったのだということはすぐにわかった。しかし、ぱつと思いついた別の「呪い」の予想が当たっているのなら、フレデリカはあまりにも残酷すぎる。

「何度も言うようだけど、フレデリカさんはエリーゼの事が大好きだからこうなっちゃったん

だよ…。」

愛情を受けたことのない人間は、愛し方が分からない。同時に、愛の温かさに耐え切れなくなる。ましてや彼女の場合は、罪の意識もあったのだからなおさらだ。

この話にこれ以上触れると、エリーゼさんが自責の念で潰れてしまう。俺は、気になつてゐるもう一つの事を聞くことにした。

「なあ…ありさ。もう、チャームは大丈夫なのか…？」

「…それがね、わかんないの。でも、もう変な発情した気持ちよさみたいなものはないよ。」

「そうか…なら、よかつたのか？」

「キュアノスがどこまで影響を及ぼしているかは未知数ですが、セレナさんのかけたチャームは消えていそうですね。」

「…そうだ。フレデリカは、どうやってキュアノスの封印を解いたんだろうな…。」

「…恐らく、刻印の刻まれたラピスラズリを集めたでしょう。」

「え…そのラピスラズリって、フレデリカさんが幼い時に聖域から盗つたつていう…？」

「…はい。キュアノスは、ラルゴ王国、和国、献花岬の三つの国が、まじないを刻印したラピスラズリで封印したと言われています。そのラピスラズリは、聖域の深層部にある『水晶の間』と呼ばれる場所に封印されているはずなので、恐らくそのラピスラズリ三つがこの部屋のど

ここにあるはずです…。」

エリーゼさんは言い終えると、くい、とサイドテーブルの引き出しを引く。するとそこには、予想通り、まじないの彫られたラピスラズリが三つ、丁寧にしまわれていた。

「やはり…そうですね。」

「これが…刻印の刻まれたラピスラズリ？」

「はい。まじないを掘った者と、光の魔法を扱える者、そしてこのラピスラズリに認められた者以外が触れると、悪魔に憑りつかれるといわれていますから、迂闊に触れないで下さいね。」

「でもこれ…どうするんですか」

「問題ありません。私は光の魔法を扱えますから。ひとまず、キュアノス本体とその破片を集めて、もう一度封印をしなければなりませんね。」

「それって、どうやって封印するの？」

「刻印の刻まれたラピスラズリ三つを三角形のようにそれぞれ配置し、その真ん中にキュアノスを置けば効力を失うはずです。どのようにしてフレデリカが封印を解いたかまでは分かりかねますが…。」

「ひとまず封印しないといけないよな…。」

「ええ。これ以上被害者を出すわけにはいきませんから…。」

「キュアノスなら、全部ここにあるよ。」

ありさは、首元に光るキュアノスのネックレスを取り外すと、ポケットにしまわれた複数個の小さな欠片と共にエリーゼさんに手渡した。

それを受け取るなり、エリーゼさんは頷いてありさにお礼を言う。そしてすぐにキュアノスを封印しようと、掌に小さな光を造り出した。

その様子を見たありさは、目を伏せて寂しそうにしていた。まるで、何かを喪失したかのような表情だ。少なからず、愛着が湧いていたのだろうか。

エリーゼさんはその様子に気づいているのか、ありさを心配そうに見つめる。今までの彼女なら、心配のあまりここで何か他の方法を考えたと提案するだろう。しかし彼女は、ふるふると首を横に振り、慎重に三つのラピスラズリを手にとると、何かを決意したようにそれらを三角形に配置した。

「ありささん、封印しますね。」

「…うん。手早くやって。」

「…わかりました。」

――。

すべて、終わった。

美しく青色に輝いていたキュアノスは、効力を失ったことで無色透明に変わり果てた。まるでそれは、水晶のように透き通っている。

この後の俺たちとはというと、刻印の刻まれたラピスラズリを聖域に戻しに行つたんだ。道中、献花岬にも寄つた。大きな湖が綺麗な国だった。

俺たちは、効力を失ったキュアノスをその湖に沈めることにしたんだ。もう二度と、この宝石が世に出てきてはいけないから。青い花も、献花して……。

「あれ？そういえば、あの時俺たちが見つけた“ローレッタ”はどうなった？」

「…ローレッタ？ああ、これのこと？」

「…え！？ありさ、いつの間にネックレスにしたんだよ！？」

「ちよちよーつと加工してみた。可愛いよね、これ。」

ありさはいつものように、にひひと笑って俺たちにウィンクする。しかし、あの時は光を放ったローレッタを何故扱えるようになっているんだろうか。

「でも不思議なことに、あの時みたいな光は放たないんだよね。変なの。」

「…ちよつとそのローレッタ、見せてもらえませんか？」

「いいよ！ちよつと待つてね」

ありさはネックレスを丁寧に外すと、エリーゼさんに手渡した。

——本当にこれは、ローレッタなのだろうか？

エリーゼさんはぺこりと会釈をしてネックレスを受け取り、様々な角度から“ローレッタ”を観察する。確かに虹色に輝き、俺たちをこの世界に飛ばしてきた代物なのだから、“ローレッタ”に違いない。そう、思っていた。

「こちらの宝石、ローレッタによく似ていますが別物ですね…。」

「ん！？でもこれ、虹色に光って、時空を飛び越えましたよ！？」

「…ローレッタの血族が本物かどうかを見間違えるはありますがありません。」

「もしかして。もしかして、だよ」

ありさは、何かを思いついたように話し始めた。

「私たちが拾ったローレッタに似たこれにはエリーゼの意志が宿ってて、助けを求めた…とか？」

「…ふふ。とても、ロマンチックです。」

ありさとエリーゼさんは向き合って、微笑み合う。その様子がとても尊かった。

「あのさ…。この宝石の名前、俺がつけてもいい？」

「え？何？いいよ？」

「この宝石の名前は………」

———
“蟋蟀”
“縛ゆ”
“縛”

「はっ……!! 夢……?」

どうやら宿ではない暗い部屋。

なんだ、俺は長い長い夢を見ていたのか……?

天井すらしつかりとは見えないくらいまだ暗い。それに、やけに眠い。

「なんだ……。もう一回寝るか……。」

俺は眠りについた。

机の上に置かれた、あの宝石の存在にも気づかないまま――。

あとがき

この度は『異世界宝石物語』のノベル版をお手に取っていただき、ありがとうございます！
著者の柚木朱莉です。

本作は、何気ない日常の中に入り込んだ“闇”と、登場人物たちの“光”を対比にしたお話を書きたくて、始まった物語です。

ちなみに、物語ラストの宝石に名前をつけるシーンですが、個人的にどのようにしてほかすか悩みました。文字を空白にするとか、はたまたモザイクっぽくするとか。でもやっぱり、文字化けってどこかゾッとするような印象を与えてくれると思ったので、文字化けを採用してみました。

皆さんにとって、この終わり方はいかがでしたでしょうか？ゾッとするような余韻は、是非とも関連作品である音声作品に引き継いで頂けば嬉しく思います。

さて、著者の私かというと、ノベルのライティングの経験がなく、やってみたい！作ってみたい！表現したい！という熱烈なる思いから、この作品が出来上がってゆきました。

稚拙な言葉がないか、何度も確認したり調べたりと致しましたが、とりあえず伝えたい事を

そのまま、今の表現したい気持ちをありのままに伝えたく、あえて分かりやすい言葉にしてある部分も残しました。

ここまで一つの作品に想いを込めるというのは、やはり普段とは別のジャンル（ノベル）になったとしても、いつ何時でも幸せなものだなあと思います。

ここまで読んで頂いた皆様には、重ねて、お礼申し上げます。ありがとうございました！

以降は、お知らせ…もとい、宣伝のようになってしまうかもしれませんが、先述の通り本作には音声作品としての展開もございます。

本作の初出がイベント出展のため、既にお手に取っていただいている皆様は、是非合わせて楽しんで頂けると幸いです。

ありさとエリーゼの声は、私、柚木朱莉が担当します。

本作を読了下さった皆様を、更に深くこの異世界宝石物語の世界へ引きずりこんでやろうという魂胆です。

ノベル版とは続いているようで続いていない？ようなお話なので、是非どちらから楽しんで頂いても大丈夫なようになっていきます。ですが、作者的にはノベル版から楽しんでいた方が、より音声に没頭頂けるのではないかと思います。

先に音声作品版をご視聴頂いている場合は、是非またループして音声作品版を聞いて頂けると、より異世界宝石物語のお話に没頭して頂けるのではないかと思います。そして音声作品版を聞いて頂いた後は、きつともう一度ノベル版を読みたくなくてくださっているはず…、そうだな。いいな。

そして、私の頭の中にいた登場人物を素敵に描いてくださったZense先生！ありがとうございます。いました。

特にお気に入りポイントはノベル版表紙のありさとエリーゼのお顔です。

なんといつても可愛すぎます。これは私的スマホの壁紙にしたいランキング1位です。

そして、先生からラフで頂いていた各キャラクターは、実はカラーだったりします。

これを私しか見れないのは勿体なくないか？と思うほど、色がつくと更に素敵です。

もしかすると、プラットフォームで公開する日が来るかもしれません。来るといいな。

長々と語ってしまいましたが、今回私のノベル処女作ということで、皆様の心にはどのような届いているかドキドキでなりません。

是非、×などで感想を呟いて頂けると嬉しいですよ。

ハッシュタグ『# 柚木朱莉作品感想』からポスト頂けましたら喜んで拝見させていただきます。

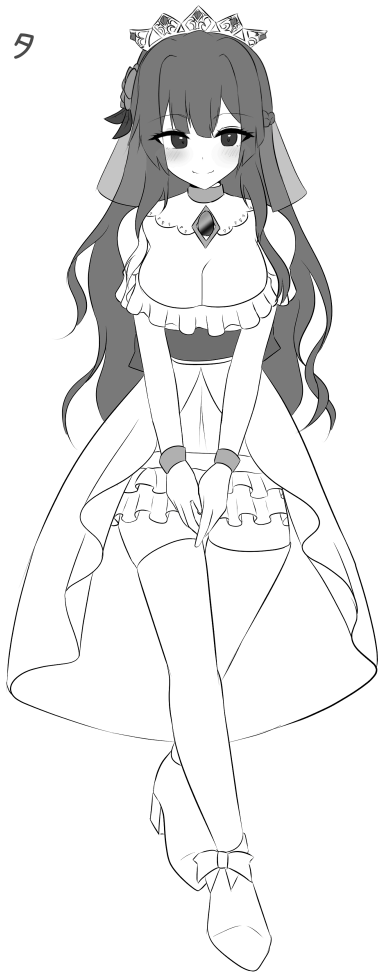
重ねてになりますが、ここまで読んでくださった皆様に、感謝を込めて。

ありがとうございました！

またどこかで、お会いいたしましょう。

2024年 金木犀の香る秋頃 柚木朱莉

エリーゼ・ル
・ローレッタ



姫沢ありさ



フレデリカ・アズール





セレナ

・ワルフロール



龍頭オトハ

異世界宝石物語

著者：柚木朱莉

イラスト：kraze

発行日：2024年10月27日

印刷所：大阪印刷株式会社

サークルへの連絡先：yuzukiakari.akaritta@gmail.com

※18歳未満の方の閲覧は固く禁じます。

※この作品はフィクションです。

※無断転載・無断アップロード・複製や、オークション等への出品を固く禁じます。
